茨城県教育財団文化財調査報告第263集

玉取向山遺跡

県立つくば養護学校（仮称）整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成18年3月

茨城県教育委員会
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第263集

玉取向山遺跡

県立つくば養護学校（仮称）整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成18年3月

茨城県教育委員会
財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，少子･高齢化の進行や地球規模での環境問題の深刻化，情報通信技術の飛躍的な発展による産業社会構造の変化など，社会情勢が大きく変化していく中で，21世紀の茨城を担う人づくりを目指しています。「個性と創造性に富むこころ豊かな人間づくり」を基本テーマとして，特別支援教育においては，自立と社会参加をめざした学校教育の充実を図っています。

このたび，茨城県はつくば市玉取地区に県立つくば養護学校（仮称）を整備することになりました。この事業予定地内には玉取向山遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県教育委員会から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け，平成16年６月から平成16年８月にかけて玉取向山遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

本書は，平成16年度に調査を行った玉取向山遺跡の調査成果を収録したもので，本書が学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお，発掘調査から本書の刊行に至るまで，委託者である茨城県教育委員会から多大な御協力を賜りましたことに対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各位からいただいた御指導，御協力に対し感謝申し上げます。

平成18年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　稲　葉　節　生

例　　言

1　本書は，茨城県教育委員会の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成16年６月から平成16年８月まで発掘調査を実施した，茨城県つくば市大字玉取字向山2,071番地ほかに所在する玉取向山（たまとりむかいやま）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調　　査　　平成16年６月１日～平成16年８月31日

整　　理　　平成17年８月１日～平成17年10月31日

3　発掘調査は，調査課長川井正一のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	吉原　作平
主任調査員	近藤　恒重
主任調査員	奥沢　哲也
調　査　員	越田真太郎

4　整理及び本書の執筆・編集は，整理第二課長大森雅之のもと，主任調査員奥沢哲也が担当した。

5　本書の作成にあたり，弥生時代の竪穴住居跡から出土したペグマタイト産石英片については，独立行政法人産業技術総合研究所地質標本館館長の青木正博氏に御指導いただいた。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，X＝＋14,240 m，Y＝＋24,320 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。

大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40 m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「A 1 区」，「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c … j，西から東へ1，2，3…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」，「B 2 b2区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　SI－住居跡　SK－土坑　SD－溝跡　P－柱穴

遺物　P－土器・陶器　TP－拓本記録土器　DP－土製品　Q－石器・石製品　M－金属製品

土層　K－撹乱

3　土層観察と遺物における色調の判定には，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

4　土層解説中の含有物については，各々総量で記述した。

5　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1) 遺構全体図は600分の1，遺構実測図は30分の1，60分の1，80分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり，それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

□ 焼土・火床面　□ 竈部（粘土）・黒色処理　■ 炉・繊維土器断面

● 土器　○ 土製品　□ 石器・石製品　△ 金属製品　■ 骨片　▲ 歯

▪ ペグマタイト産石英片

6　遺物観察表及び遺構一覧表の作成方法については，次のとおりである。

(1) 計測値の単位はcm及びgで示したが，大きさにより異なる場合もありそれらについては個々に単位を表示した。

(2) 遺物観察表及び遺構一覧表とも（　）は現存値，［　］は推定値であることを示している。

(3) 備考欄には，土器の現存率及び写真図版番号その他必要と思われる事項を記した。

7　「主軸」は，竈（炉）を持つ竪穴住居跡については竈（炉）を通る軸線とし，他の遺構については長軸（径）を通る軸線を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸（径）」方向は，それぞれの軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E）。

抄　　録

ふりがな	たまとりむかいやまいせき
書名	玉取向山遺跡
副書名	県立つくば養護学校（仮称）整備事業地内埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第263集
著者名	奥沢　哲也
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　TEL029（225）6587
発行日	2006（平成18）年３月24日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
玉取向山遺跡（たまとりむかいやまいせき）	茨城県（いばらきけん）つくば市（しおお）大字玉取字向山（あざたまとりあざむかいやま）2,071番地ほか	08220 － 612	36度 ７分 40秒	140度 ６分 40秒	20.6 ～ 27.6m	20040601 ～ 20040831	20,203㎡	県立つくば養護学校（仮称）整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉取向山遺跡	集落跡	縄文	土坑　6基	縄文土器（深鉢・甕） 石器（石斧・石鏃）	
		弥生	竪穴住居跡　4軒	弥生土器（壺） 土製品（紡錘車・勾玉）	
		古墳	竪穴住居跡　1軒	土師器（坏・甕）	
	墓跡	中世	火葬土坑　3基 土坑墓　5基	金属製品（古銭）	
	その他	近世	溝跡　2条	陶・磁器（猪口・灯明受皿・擂鉢）	
		時期不明	土坑　85基 溝跡　10条 炉跡　12基		

要約	縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。つくば地域では数少ない弥生時代後期前半の集落跡が確認された。中世においては，火葬土坑及び土坑墓が確認された。近世の区画溝と考えられる直線上に延びる溝が確認された。

目　　次

序
例言
凡例
抄録
目次
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査経過……1
第２章　位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3
第３章　調査の成果……8
　第１節　遺跡の概要……8
　第２節　基本層序……8
　第３節　遺構と遺物……9
　　1　縄文時代の遺構と遺物……9
　　土坑……9
　　2　弥生時代の遺構と遺物……14
　　竪穴住居跡……15
　　3　古墳時代の遺構と遺物……26
　　竪穴住居跡……26
　　4　中・近世の遺構と遺物……29
　　(1) 火葬土坑……29
　　(2) 土坑墓……32
　　(3) 溝跡……35
　　5　その他の遺構と遺物……37
　　(1) 土坑……37
　　(2) 溝跡……41
　　(3) 炉跡……42
　　(4) 遺構外出土遺物……44
　第４節　まとめ……46
写真図版
付図

第１章　調　査　経　緯

第１節　調査に至る経緯

平成15年７月８日，茨城県教育委員会教育長（教育庁財務課扱い）は，茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）に対して県立つくば養護学校（仮称）整備地内に埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は平成15年７月30日に現地踏査を，平成15年９月16日から９月18日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成15年10月６日，茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）は，茨城県教育委員会教育長（教育庁財務課扱い）あてに事業地内に玉取向山遺跡が所在する旨回答した。

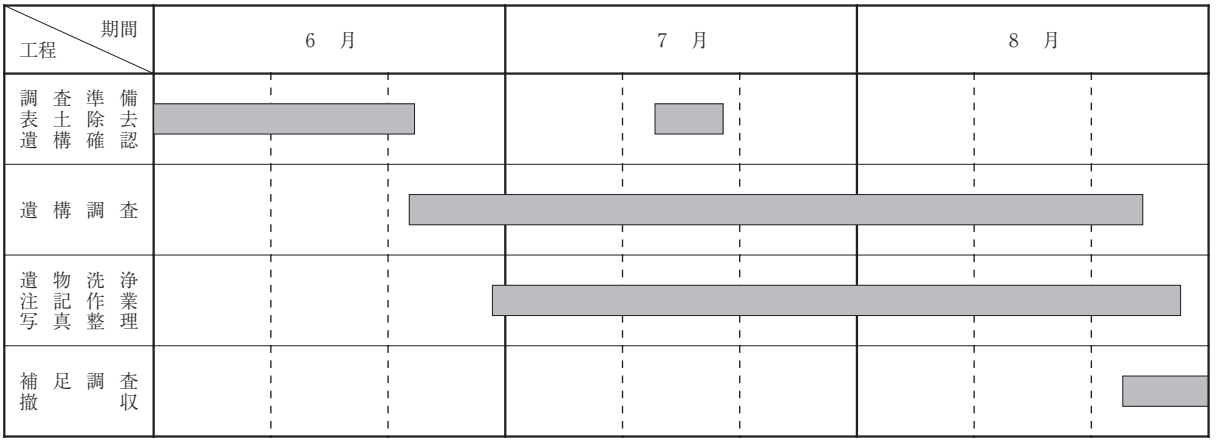
平成15年12月４日，茨城県教育委員会教育長（教育庁財務課扱い）は茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）に対して，文化財保護法第57条の３第１項の規定に基づき，土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）は，現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると決定し，平成16年１月７日，茨城県教育委員会教育長（教育庁財務課扱い）あてに，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成16年１月28日，茨城県教育委員会教育長（教育庁財務課扱い）は，茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）あてに，県立つくば養護学校（仮称）に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成16年２月５日，茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）は，茨城県教育委員会教育長（教育庁財務課扱い）あてに玉取向山遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて調査機関として，財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県教育委員会教育長（教育庁財務課扱い）から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成16年６月１日から平成16年８月31日まで発掘調査を実施することになった。

第２節　調査経過

調査は平成16年６月１日から８月31日まで実施した。その概要を表で記載する。



第１図　玉取向山遺跡調査区設定図

第２章　位 置 と 環 境

第１節　地理的環境

玉取向山遺跡は，茨城県つくば市大字玉取字向山2,071番地ほかに所在している。

つくば市は，茨城県南西部に位置し，東方約５㎞には霞ヶ浦，北端には筑波山がある。つくば市域の地勢は，標高が25～26ｍのほぼ平坦な台地と，この台地の両端を流れる桜川と小貝川によって大きく開析された標高約５ｍほどの沖積低地からなっている。台地と沖積低地との標高差は約20ｍである。また，この二つの河川間の台地には，花室川，蓮沼川，東谷田川，西谷田川など中小河川が南流して，台地縁部を樹枝状に開析している。そのため，谷津や低地が南北に細長く発達し，北から南に細長く延びる舌状台地が形成されている。

この台地は筑波・稲敷台地と呼ばれ，千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部であり，地質的には，新生代第四紀洪積世に形成された地層が堆積している。下層は成田層及び竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし，その上に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層，その上に関東ローム層が堆積し，最上部は腐植土層となっている[1)]。関東ローム層は，新期ロームに属し，武蔵野ローム，立川ロームに比定され，軽石層の分布をみると，富士・箱根火山群の活動に由来するものと考えられる。

当遺跡は，つくば市のほぼ中央部東側（旧筑波郡大穂町）の桜川右岸に位置し，桜川から南に入り込む樹枝状の谷津の最奥部にある標高20～27ｍの舌状台地上に立地している。

当遺跡とその周辺の土地利用の現状は，台地上の縁辺部の一部が雑木林・杉林のほか，主として畑地として利用されている。また，遺跡の位置する舌状台地を挟むように入り込む谷津は水田または休耕田であり，桜川流域の低地は水田として利用されている。

第２節　歴史的環境

玉取向山遺跡は，弥生時代を中心とした縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。ここでは，桜川流域の遺跡を中心に分布の概要について述べる[2)]。

旧石器時代の遺跡数は他の時代と比べて極めて少ない。ナイフ形石器や尖頭器は桜川左岸の北条中台遺跡[3)]〈2〉，花室川左岸の柴崎遺跡[4)]〈3〉，東岡中原遺跡[5)]〈4〉から出土している。東岡中原遺跡では10か所の石器集中地点が確認され，３か所の石器集中地点から，ナイフ形石器，掻器，楔形石器，尖頭器，石核，石刃，剥片などが多数出土している。

縄文時代になると，当流域では遺跡の存在が数多く確認されている。当遺跡周辺の桜川右岸だけでも，大曽根松原遺跡（早期～晩期）[6)]〈5〉，玉取寺山遺跡（前期）〈6〉，大曽根Ｂ遺跡（中期）〈7〉，大曽根鹿島台遺跡（中期～晩期）〈8〉，大曽根吹上貝塚（後期）〈9〉がある。また，柴崎遺跡（早期～前期，後期），上野天神遺跡（中期）〈10〉，花室遺跡（中期～晩期）〈11〉，金田西坪Ｂ遺跡（中期～晩期）[7)]〈12〉，上境旭台貝塚（後期～晩期）〈13〉，中根中谷津遺跡（後期～晩期）〈14〉など，多くの遺跡が所在し，下流域では国指定史跡の上高津貝塚がある。

弥生時代の遺跡は他の時代と比べると少なく，８遺跡が確認されているだけである。当遺跡周辺では，隣接する玉取遺跡〈15〉で後期後半の竪穴住居跡１軒が確認され，上稲吉式の広口壺の土器片の出土が報告されて

いる[8]。また，大曽根Ａ遺跡〈16〉では，少量の土器片が採集されている。桜川流域においては上野陣場遺跡〈17〉で竪穴住居跡５軒，土坑１基が確認され，後期後半の広口壺，土製紡錘車が出土している。土坑から出土した広口壺は，底部に焼成後の穿孔が見られ，煮沸具が土器棺に転用された可能性が指摘されている[9]。北条中台遺跡では竪穴住居跡10軒が確認され，後期後半の上稲吉式の広口壺，高坏，土製紡錘車が出土している[3]。明石遺跡〈18〉では住居跡13軒が確認されており，広口壺，石鏃，炉石などが出土している。時期は，後期前葉から中葉までと報告されている[10]。水守荒神遺跡〈19〉では後期の竪穴住居跡１軒が確認され，甕の出土が報告されている[11]。山木古墳〈20〉では古墳の墳丘の下１ｍから竪穴住居跡１軒が確認され，後期の広口壺の破片と土製紡錘車が出土している[12]。また，遺構は確認されてはいないが，神郡条里跡〈21〉でも条里遺構調査のトレンチ内から後期の広口壺，土製紡錘車が出土している[13]。

古墳時代の遺跡は，当流域では61遺跡が確認されている。北条中台遺跡では竪穴住居跡100軒のほか，古墳65基と，方形周溝墓２基が確認され，墓域と居住域の複合地域であったことが判明している[3]。また，小田小田橋遺跡〈22〉では，6～７世紀の竪穴住居跡９軒が確認されている。上野陣場遺跡では，竪穴住居跡80軒や掘立柱建物跡３棟が確認されており，前期の小集落と後期の６世紀後葉から７世紀前葉にかけての大集落が確認されている[9]。この他，栗原中台遺跡〈23〉，栗原大山遺跡〈24〉，上境作ノ内遺跡〈25〉などの包蔵地が数多く所在する。古墳・古墳群では，当遺跡に隣接して玉取古墳群〈26〉があり前方後円墳１基，円墳２基が現存している。周辺では，玉取一の矢古墳群〈27〉，大曽根松原古墳群〈28〉がある。この他，全長80ｍでこの付近最大の前方後円墳である上野天神塚古墳〈29〉，上野定使古墳群〈30〉をはじめ，栗原愛宕塚古墳〈31〉，栗原十日塚古墳〈32〉，円筒埴輪・人物埴輪・動物埴輪が出土した上境滝の臺古墳群〈33〉，埴輪片・石棺破片が出土している横町古墳群〈34〉，前方後円墳２基・円墳１基から構成される松塚古墳群〈35〉などがある。

奈良・平安時代には，当該地は筑波郡片穂郷に属していたと考えられており，この流域において62遺跡が確認されている[14]。なかでも，当遺跡の南東約４㎞に位置する国指定史跡の金田西〈36〉・金田西坪Ａ〈37〉・金田西坪Ｂ遺跡，九重東岡廃寺〈38〉が注目される[7]。これらの遺跡に隣接している東岡中原遺跡は，これら郡衙域とほぼ同時期に存在しており密接に関係する集落跡と考えられている[5]。また，桜川の上流左岸には，筑波郡衙及び郡寺である国指定史跡平沢官衙遺跡〈39〉や北条中台廃寺跡〈40〉も所在している。他にも，160軒以上の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出された柴崎遺跡[4]，竪穴住居跡70軒や掘立柱建物跡11棟や氷室状遺構と考えられる大型円形土坑３基が確認されている上野陣場遺跡[9]や九重廃寺系軒平瓦と筑波廃寺系軒丸瓦が出土した下大島遺跡〈41〉などが確認されている。

中世における当地域は，小田氏，結城氏，多賀谷氏，佐竹氏などの支配を受け，江戸期においては大名堀利重の支配地となり，玉取藩が成立する。玉取藩は，三代通周が除封され絶えるが，通周の実弟利雄が旧領地のうち3,000石を相続することが認められ，旗本として名跡をついだ。当地域は，旗本堀氏と天領の相給村として幕末に至ることとなる[15]。中・近世以降の遺跡としては，近年の調査で数多く確認され，中世54遺跡，近世50遺跡を数える。柴崎遺跡では，中世の遺構として方形竪穴遺構が95基確認され，12～13世紀の集落跡と想定されている[4]。この他では，城館跡が多く，桜川左岸には小田氏の居城であった国指定史跡小田城跡〈42〉，田土部館跡〈43〉があり，桜川右岸には玉取城跡〈44〉，方穂故城跡〈45〉，金田城跡〈46〉，花室城跡〈47〉，上ノ室城跡〈48〉などがある。さらに，筑波山の南，三村山麓一帯には中世寺院群が位置し，つくば市三村山清冷院極楽寺跡〈49〉には，13世紀半ば，大和の高僧忍性が来往して，布教に努めたことが伝えられている。

※　文中の〈　〉内の番号は，周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と同じである。

註

1）大森昌衛・蜂須紀夫「茨城の地質をめぐって」『日曜の地学』8　築地書館　1979年9月

2）a茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』茨城県教育委員会　2001年3月

b つくば市教育委員会『つくば市遺跡地図』 2001年7月

3）吉川明宏・新井聡・黒澤秀雄「（仮称）北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書　中台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第102集　1997年12月

4）a土生朗治「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）　柴崎遺跡Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第72集　1992年3月

b萩野谷悟「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）　柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第93集　1994年9月

5）ａ成島一也「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　中原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集　2000年3月

b成島一也・宮田和男「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　中原遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集　2000年3月

c高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和宏「中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　中原遺跡3」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集　2001年3月

ｄ駒沢悦郎「東岡中原遺跡4　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第252集　2004年3月

6）鈴木美治「主要地方道大穂千代田線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書　松原古墳群　松原遺跡　南谷津遺跡」『茨城県教育財団文化財　調査報告』第56集　1990年3月

7）a川上直澄・長谷川聡・大塚雅昭「金田西・西坪Ｂ遺跡　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第195集　2002年3月

b白田正子「金田西遺跡　金田西坪Ｂ遺跡　九重東岡廃寺　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第209集　2003年3月

8）石橋充・関口友紀『玉取遺跡－火葬場建設に伴う発掘調査報告』つくば市教育委員会　2000年3月

9）川上直澄・長谷川聡・大塚雅昭「上野陣場遺跡　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第182集　2002年3月

10）寺門千勝・大関武「主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書　明石遺跡　明石北原遺跡　上白遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第164集　2000年3月

11）関口友紀「茨城県西部地域における弥生時代後期の土器について－桜川中流域を中心として－」『日本考古学の基礎研究』茨城大学人文学部考古学研究室　2001年3月

12）筑波町史編纂専門委員会『筑波町史　上巻』つくば市　1991年3月

13）神郡条里遺跡発掘調査会『神郡条里遺跡』つくば市教育委員会　1982年3月

14）大穂町史編纂委員会『大穂町史』つくば市大穂地区教育事務所　1989年3月

15）前掲文献14）に同じ

第２図　玉取向山遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院「土浦」１：50,000）

表１　玉取向山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	玉取向山遺跡		○	○	○		○	○	28	大曽根松原古墳群				○			
2	北条中台遺跡	○	○	○	○	○	○	○	29	上野天神塚古墳				○			
3	柴崎遺跡	○	○	○	○	○	○		30	上野定使古墳群				○			
4	東岡中原遺跡	○	○		○	○	○	○	31	栗原愛宕塚古墳				○			
5	大曽根松原遺跡		○		○	○	○	○	32	栗原十日塚古墳				○			
6	玉取寺山遺跡		○		○	○			33	上境滝の臺古墳群				○			
7	大曽根Ｂ遺跡		○		○	○			34	横町古墳群				○			
8	大曽根鹿島台遺跡		○						35	松塚古墳群				○			
9	大曽根吹上貝塚		○						36	金田西遺跡		○		○			
10	上野天神遺跡		○		○	○			37	金田西坪Ａ遺跡					○		
11	花室遺跡		○			○			38	九重東岡廃寺				○	○		
12	金田西坪Ｂ遺跡		○		○	○			39	平沢官衙遺跡				○	○		
13	上境旭台貝塚		○		○				40	北条中台廃寺跡					○		
14	中根中谷津遺跡	○	○			○		○	41	下大島遺跡					○		
15	玉取遺跡			○	○	○		○	42	小田城跡						○	
16	大曽根Ａ遺跡			○	○	○			43	田土部館跡(新治村)						○	
17	上野陣場遺跡		○	○	○	○	○	○	44	玉取城跡						○	○
18	明石遺跡	○	○	○	○	○	○		45	方穂故城跡						○	○
19	水守荒神遺跡			○	○				46	金田城跡						○	
20	山木古墳			○	○				47	花室城跡		○	○	○	○	○	○
21	神郡条里跡			○	○	○	○		48	上ノ室城跡		○			○	○	○
22	小田小田橋遺跡				○	○			49	三村山清冷院極楽寺跡						○	
23	栗原中台遺跡		○	○	○	○	○	○	50	上野古屋敷遺跡	○	○	○	○	○	○	○
24	栗原大山遺跡				○	○	○		51	上境古屋敷遺跡				○	○	○	○
25	上境作ノ内遺跡			○	○	○			52	栗原古塚古墳					○	○	○
26	玉取古墳群				○				53	栗原沼向遺跡				○	○	○	○
27	玉取一の矢古墳群				○				54	栗原白旗遺跡		○			○	○	○

第３章　調 査 の 成 果

第１節　遺跡の概要

玉取向山遺跡は，つくば市の中央部東側に位置し，北に桜川が東流している。本遺跡は，桜川から南に入り込む樹枝状の谷津の最奥部の標高約20～27ｍの台地上に立地している。調査前の現況は，畑地及び山林であり，調査面積は，20,203㎡である。

調査は，トレンチ調査を基本とし，トレンチ内に遺構が確認された場合は，拡張して調査を行った。また，調査区中央部及び東部については，全面的に表土除去を行い調査した。

調査の結果，当遺跡は，縄文時代から近世までの複合遺跡であることが判明した。縄文時代の土坑６基，弥生時代の竪穴住居跡４軒，古墳時代の竪穴住居跡１軒，中世の火葬土坑３基，土坑墓５基，近世の溝２条を確認した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20㎝）に14箱出土している。旧石器時代の遺物は，石器（剥片）である。縄文時代の遺物は，縄文土器（深鉢・甕），石器（石斧・石鏃）などである。弥生時代の遺物は，弥生土器（壺），土製品（紡錘車・勾玉）などである。古墳時代の遺物は，土師器（坏・甕）などである。中・近世の遺物では，陶磁器（猪口・灯明受皿・擂鉢），金属製品（古銭，鉛玉）などである。

第２節　基本層序

調査区の中央部（Ｅ５i2）にテストピットを設定して，基本土層の観察を行った。

第１層は，黒褐色を呈する現耕作土で，ローム粒子を少量含み，粘性・締まりとも普通である。層厚32～42㎝である。

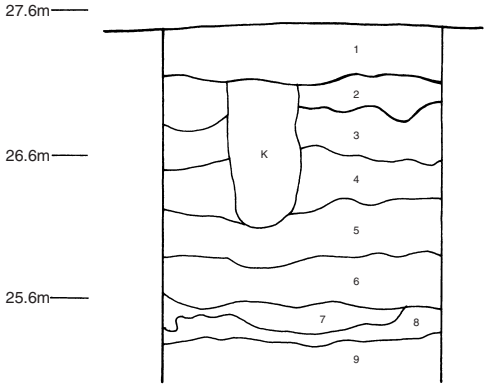
第２層は，ローム粒子を多量，赤色スコリア粒子を微量含み，褐色を呈するローム層である。締まりは普通で，粘性は強い。層厚は14～34㎝である。

第３層は，ローム粒子を多量，赤色スコリア粒子，黒色粒子を微量含み，褐色を呈するローム層であるが，上下の層よりも色調が暗い。粘性は普通で，締まりは強い。層厚は26～42㎝である。

第４層は，ローム粒子を多量，赤色スコリア粒子を微量含み，明褐色を呈するローム層であり，上下の層よりもやや明るめの層である。粘性はやや強く，締まりは強い。層厚は24～44㎝である。

第５層は，ローム粒子を極めて多量，赤色スコリア粒子，黒色粒子を微量含み，黄褐色を呈するローム層である。粘性・しまりとも極めて強く，層厚は30～40㎝である。

第６層は，ローム粒子を多量，赤色スコリア粒子，黒色粒子を微量含み，褐色を呈するローム層である。粘性・締まりともに強く，層厚は24～38㎝である。



第３図　基本土層図

第７層は，黄褐色を呈する粘土化したローム層で，粘性・しまりとも極めて強い。層中の鉄分が水分によって酸化している。層厚は２～26㎝である。

第８層は，橙色を呈するローム層から粘土層への漸移層である。粘性・締まりとも極めて強い。層中の鉄分が水分によって酸化している。層厚は８～20㎝である。

第９層は，にぶい黄褐色を呈する粘土層である。粘性・しまりとも極めて強い。層中の鉄分が水分によって酸化している。層厚は８～20㎝である。

遺構の多くは，第２層上面で確認された。

第３節　遺構と遺物

１　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は，土坑６基が確認された。それらは，標高27.0ｍほどの台地の平坦部から，台地に入り込む谷部にかけての緩斜面に位置している。以下，確認された遺構及び遺物について記述する。

なお，縄文土器片が出土した土坑は，他に41基確認されている。出土状況からそれらは，流れ込みあるいは混入したものと判断し，その他の遺構として取り扱うことにする。

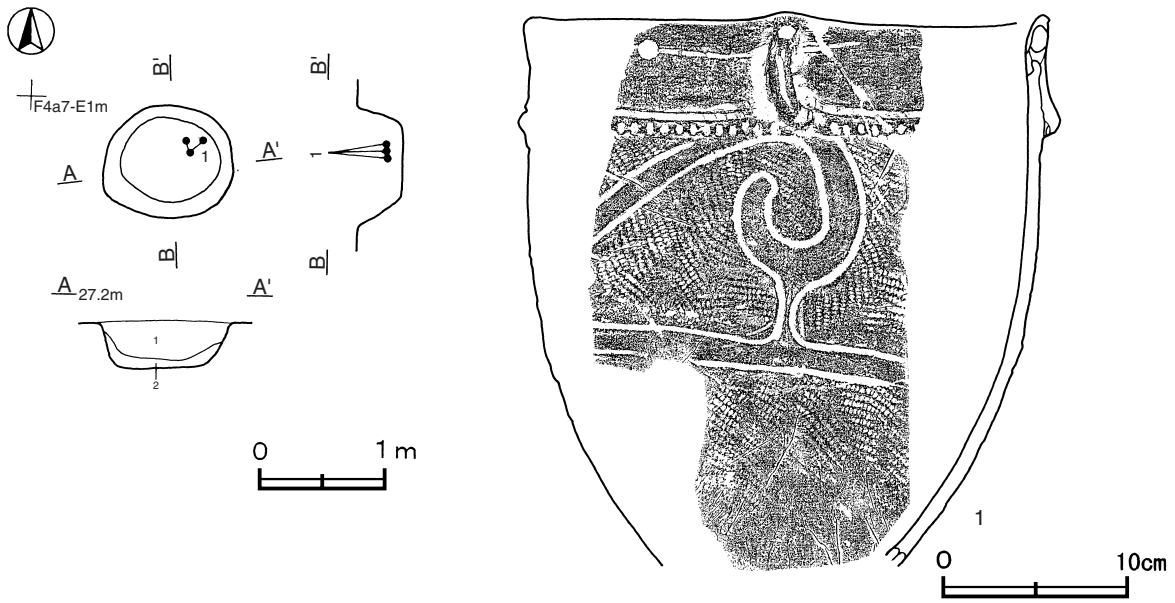
土坑

第18号土坑（第４図）

位置　調査区中央部のＦ４ a7区，標高27.0ｍほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　長径1.08ｍ，短径0.92ｍの楕円形で，長径方向はＮ－60°－Ｅである。深さは36㎝で，底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。規則的な堆積状況を示しているが，全体にロームブロックや炭化粒子を含んだ人為堆積である。



第４図　第18号土坑・出土遺物実測図

土層解説
1　暗 褐 色　　ロームブロック・炭化粒子少量　　2　褐　　色　　ローム粒子中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片22点（深鉢）が，覆土中層から下層にかけて出土している。１は，土層断面図の第１層下部から第２層にかけた位置で折り重なって出土している。土坑の埋め戻し時に廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は，出土土器から後期前葉と考えられる。

第18号土坑出土遺物観察表（第４図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　考
1	縄文土器	深鉢	〔27.2〕	(29.4)	－	長石・石英・金雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	胴部LR単節縄文を地文として，2本の沈線でJ字状に区画後，区画内磨消　口縁部下端を押圧を施した隆帯文で区画後，口縁部磨消　C字状隆帯文貼付　補修痕有	覆土下層	20% PL 7

第29号土坑（第５図）

位置　調査区中央部のＥ５i6区，標高26.9mほどの台地の平坦部に位置している。

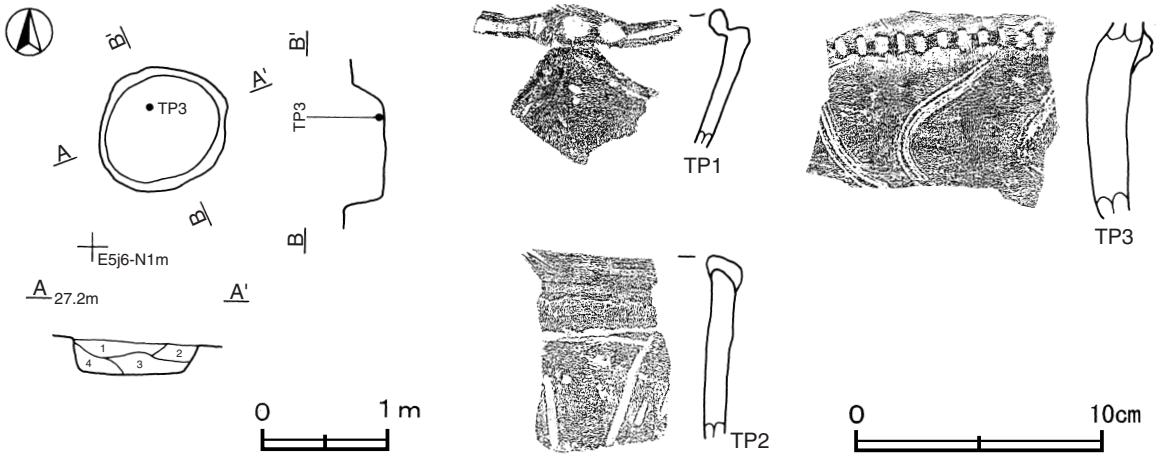
規模と形状　長径1.14m，短径0.98mの楕円形で，長径方向はＮ－58°－Ｅである。深さは30㎝で，底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　４層に分層される。各層に炭化粒子を含み，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説
1　暗 褐 色　　ロームブロック・炭化粒子微量　　3　黒 褐 色　　炭化粒子少量，ロームブロック微量
2　暗 褐 色　　ローム粒子・炭化粒子微量　　4　暗 褐 色　　炭化粒子少量

遺物出土状況　縄文土器片39点（深鉢），石器１点（磨石）が出土している。土器片は，覆土中層から下層にかけて出土している。土坑の埋め戻し時に廃棄されたと考えられる。TP3は底面から出土している。

所見　時期は，出土土器から後期前葉と考えられる。



第５図　第29号土坑・出土遺物実測図

第29号土坑出土遺物観察表（第５図）

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備考
TP１	縄文土器	深鉢	石英	灰褐	普通	波状口縁部片　口唇部に３個単位の刺突文と沈線文	覆土中	PL 7

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　考
TP２	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部片　半截竹管による縦位の沈線文	覆土中	PL７
TP３	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部片　無文帯の下端を押圧を施した隆帯文で区画　胴部縦位の波状櫛歯状文	覆土中	PL７

第30号土坑（第６図）

位置　調査区中央部のＦ４ｃ8区，標高27.0mほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　径0.90mほどの円形で，深さは，36cmである。底面は平坦で，壁は内傾しながら立ち上がっている。

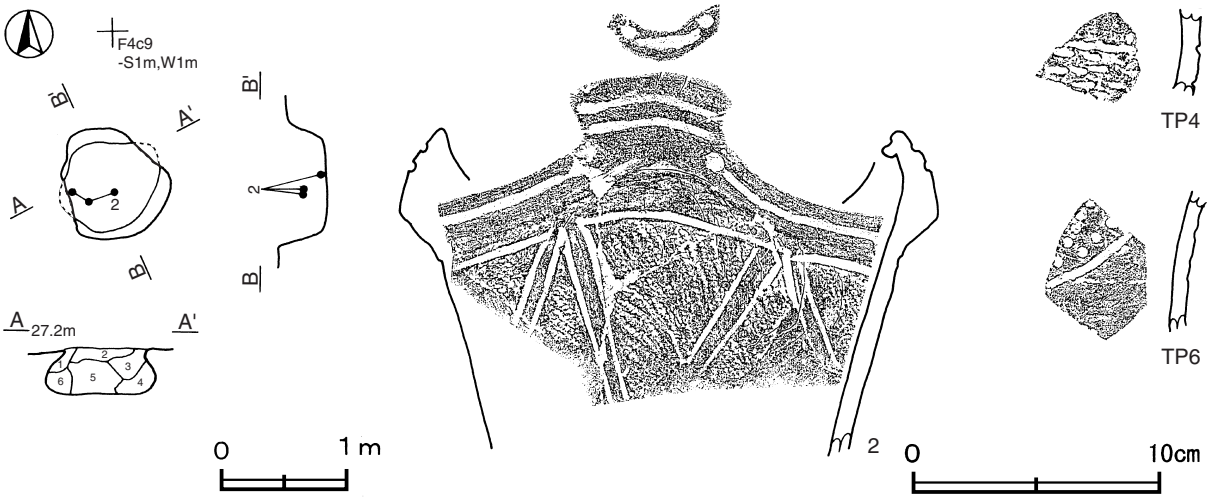
覆土　６層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

１	褐　　色	ローム粒子中量	４	褐　　色	ローム粒子多量
２	褐　　色	ロームブロック・炭化粒子微量	５	暗 褐 色	ロームブロック・炭化物微量
３	にぶい褐色	ローム粒子中量	６	暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況　縄文土器片88点（深鉢）が，出土しており，覆土中層から下層にかけて出土している。２は覆土中層から下層にかけて出土しており，土坑の埋め戻し時に廃棄されたものと考える。TP４・６は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から後期前葉と考えられる。



第６図　第30号土坑・出土遺物実測図

第30号土坑出土遺物観察表（第６図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　考
2	縄文土器	深鉢	〔18.1〕	(13.1)	－	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	波頂部内面沈線及び２個単位の円形刺突文　口唇部沈線及び２個単位の円形刺突文　口縁部沈線　胴部ＬＲ単節縄文施文後，2条一組の沈線区画　沈線区画間を磨消	覆土中層～下層	5% PL７

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備考
TP４	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部片　半截竹管による沈線に沿って刺突文	覆土中	PL７
TP６	縄文土器	深鉢	雲母	にぶい赤褐	普通	胴部片　半截竹管による沈線に沿って円形刺突文	覆土中	PL７

第31号土坑（第７図）

位置　調査区中央部のＥ４h8区，標高27.0mほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　長径1.16m，短径1.04mの楕円形で，長径方向はN－０°である。深さは56cmで，底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

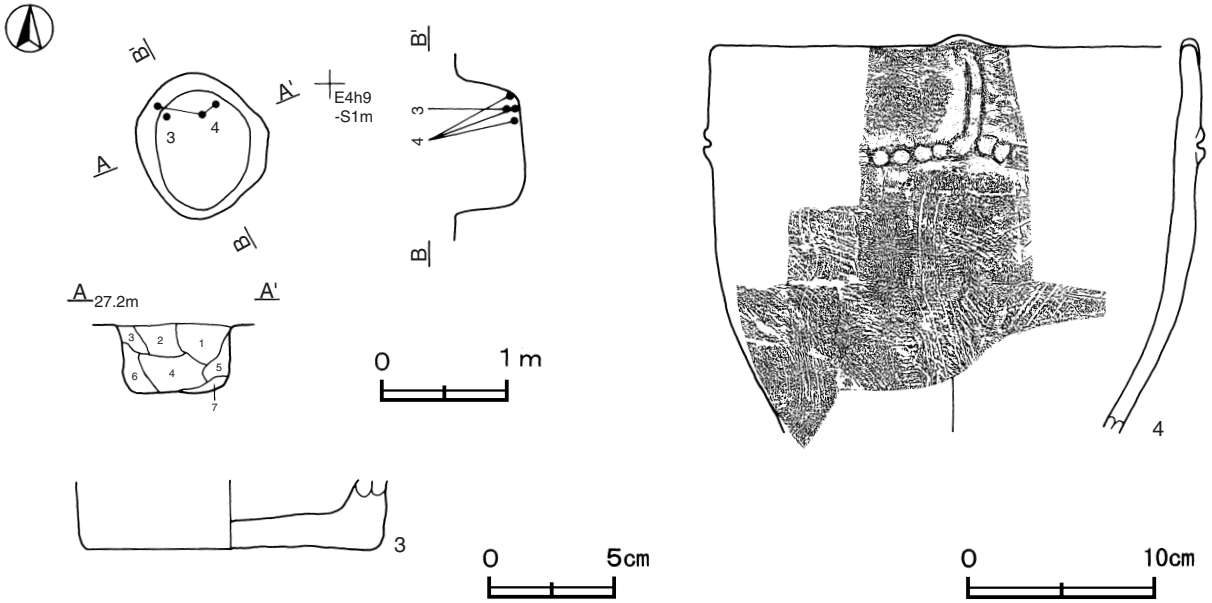
覆土　７層に分層される。各層に焼土や炭化物を含み，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量，炭化物微量	5	褐色	ローム粒子中量，炭化物微量
2	暗褐色	炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量	6	褐色	ローム粒子中量，炭化粒子微量
3	褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量	7	褐色	ローム粒子少量
4	暗褐色	炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子微量			

遺物出土状況　縄文土器片65点が，覆土中層から底面にかけて出土している。３・４は，ともに覆土下層から底面にかけて出土しており，土坑の埋め戻し時に廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は，出土土器から後期前葉と考えられる。



第７図　第31号土坑・出土遺物実測図

第31号土坑出土遺物観察表（第７図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	－	(2.8)	〔11.7〕	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部平底で無文	覆土下層	5%
4	縄文土器	深鉢	〔25.0〕	(21.0)	－	長石・石英・小礫	明赤褐	普通	胴部ＬＲ単節状文を地文に櫛歯状工具による縦位の波状櫛歯状文　口縁部横ナデ　下端を押圧を施した隆帯文で区画　Ｃ字状隆帯文貼付	底面	5% PL７

第52号土坑（第８・９図）

位置　調査区東部のＥ５c4区，標高26.5mほどの緩斜面に位置している。

規模と形状　長径0.92m，短径0.82mの楕円形で，長径方向はＮ－28°－Ｅである。深さは60cmで，底面は平坦である。壁は，ほぼ直立している。

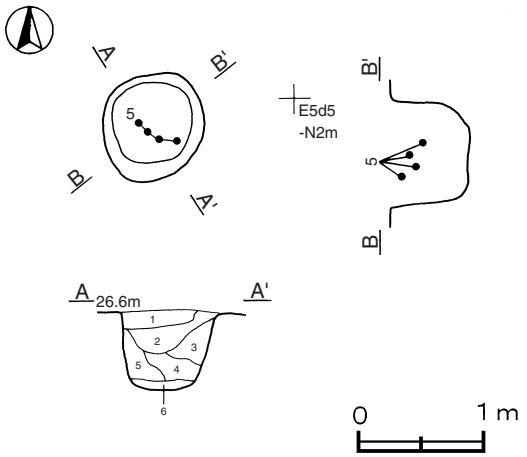
覆土　６層に分層される。各層に焼土や炭化物を含み，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

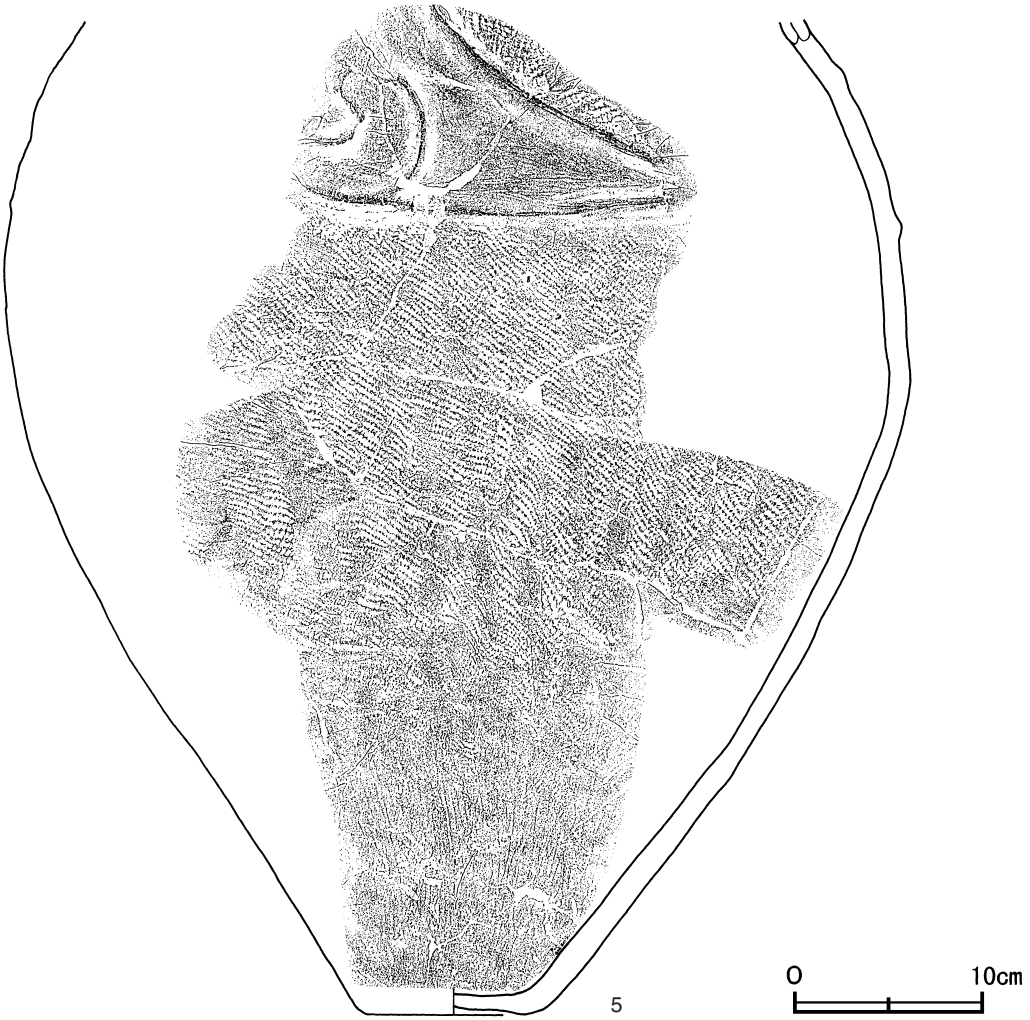
1	暗 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2	極暗褐色	焼土ブロック少量・炭化物・ローム粒子微量
3	暗 褐 色	ロームブロック少量，焼土ブロック微量
4	黒 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5	黒 褐 色	ロームブロック少量，焼土粒子微量
6	黒 褐 色	ローム粒子少量

遺物出土状況　縄文土器片98点（深鉢）が，覆土上層から下層にかけて出土している。5は，覆土上層から中層の位置で土圧でつぶれたような状況で出土しており，土坑の埋め戻し時に廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は，出土土器から中期末葉と考えられる。



第８図　第52号土坑実測図



第９図　第52号土坑出土遺物実測図

第52号土坑出土遺物観察表（第９図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　考
5	縄文土器	甕	－	〔51.2〕	9.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部LR単節縄文施文後，隆帯による横方向のC字状，剣先状の文様描出　文様内部磨消後丁寧な磨き	覆土上層～中層	60% PL 7

第105号土坑（第10図）

位置　調査区北部のＤ４i9区，標高27.2mほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　径1.4mほどの円形で，深さは48㎝である。底面は平坦で，壁は内傾しながら立ち上がっている。

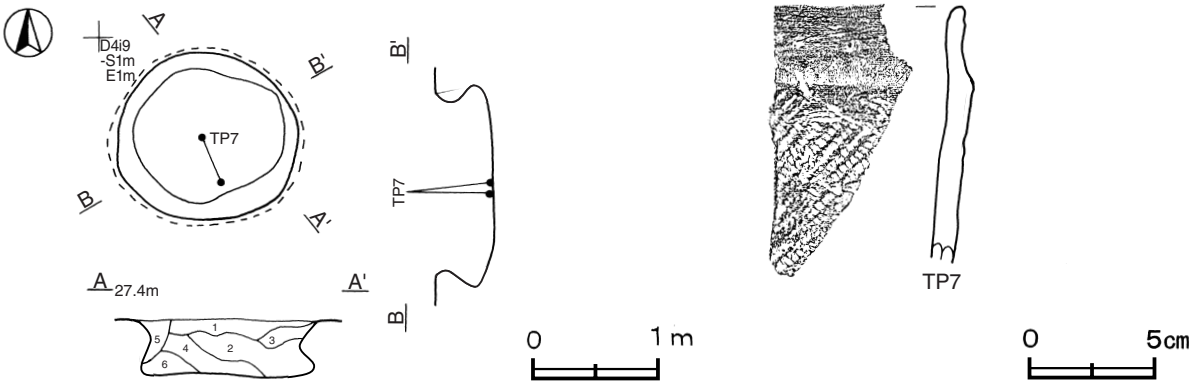
覆土　６層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	暗 褐 色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	4	暗 褐 色	ロームブロック微量
2	暗 褐 色	ローム粒子中量	5	暗 褐 色	ローム粒子中量
3	褐　　色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	6	褐　　色	ローム粒子少量

遺物出土状況　縄文土器片８点（深鉢）が，覆土中層から底面にかけて出土している。TP７は底面から出土しており，土坑の埋め戻し時に廃棄されたものと考えられる。

所見　時期は，出土土器から後期前半と考えられる。



第10図　第105号土坑・出土遺物実測図

第105号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	文 様 の 特 徴	出土位置	備　考
TP７	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部片　胴部RL単節縄文施文	底面	PL７

表２　縄文時代土坑一覧表

番号	位　置	長径方向	平面形	規　模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備　考（時期･旧→新）
				長径×短径(m)	深さ(㎝)					
18	Ｆ４a7	N－60°－E	楕円形	1.08×0.92	36	外傾	平坦	人為	深鉢	後期前葉
29	Ｅ５i6	N－58°－E	楕円形	1.14×0.98	30	外傾	平坦	人為	深鉢	後期前葉
30	Ｆ４c8	－	円形	0.92×0.90	36	内傾	平坦	人為	深鉢	後期前葉
31	Ｅ４h8	N－０°	楕円形	1.16×1.04	56	外傾	平坦	人為	深鉢	後期前葉
52	Ｅ５c4	N－28°－E	楕円形	0.92×0.82	60	垂直	平坦	人為	甕	中期末葉
105	Ｄ４i9	－	円形	1.42×1.32	48	内傾	平坦	人為	深鉢	後期前半

２　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は，竪穴住居跡４軒が確認された。それは，標高27.0mの台地の平坦部から縁辺部にかけて位置している。以下，確認された遺構及び遺物について記述する。

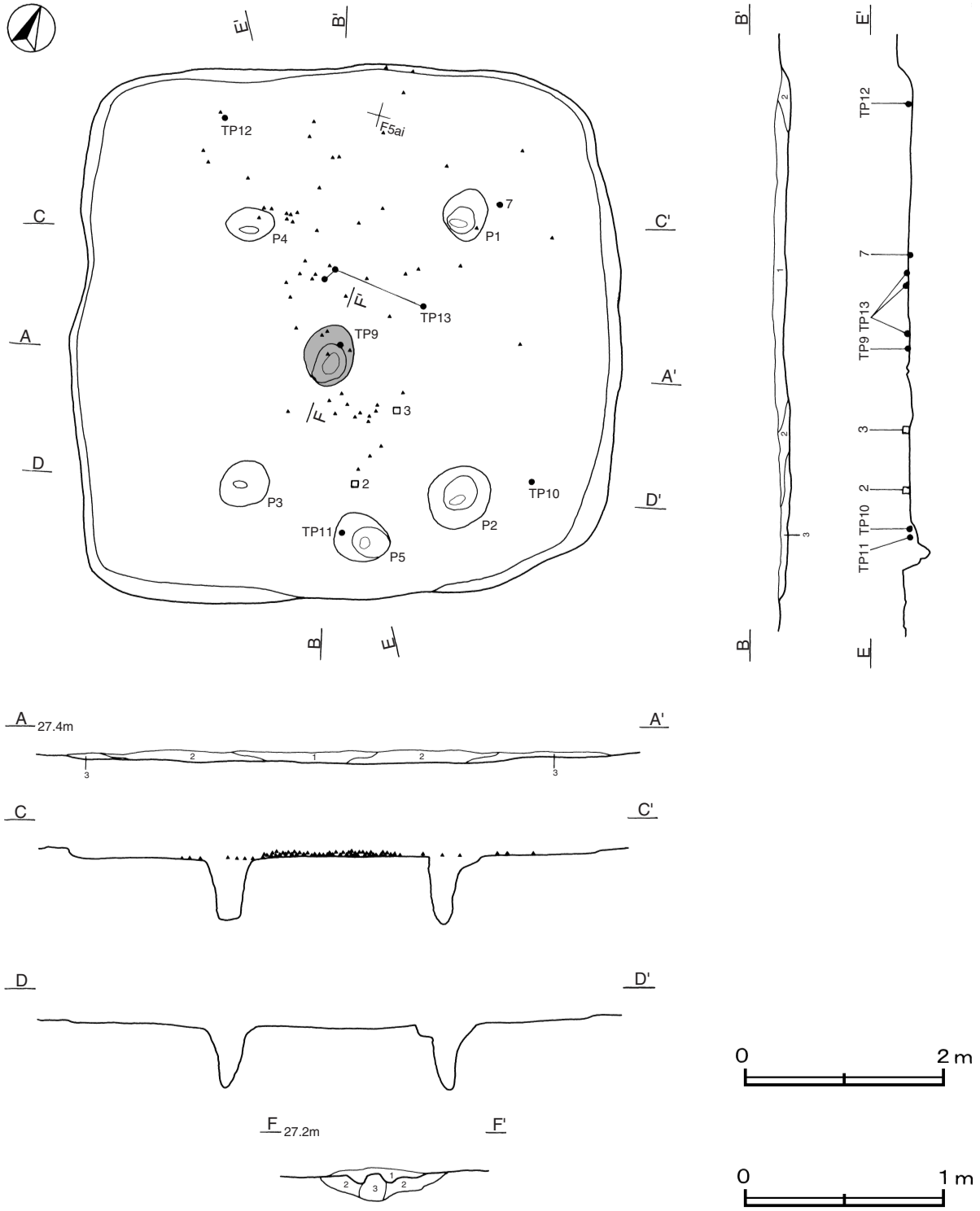
竪穴住居跡

第１号住居跡（第11・12図）

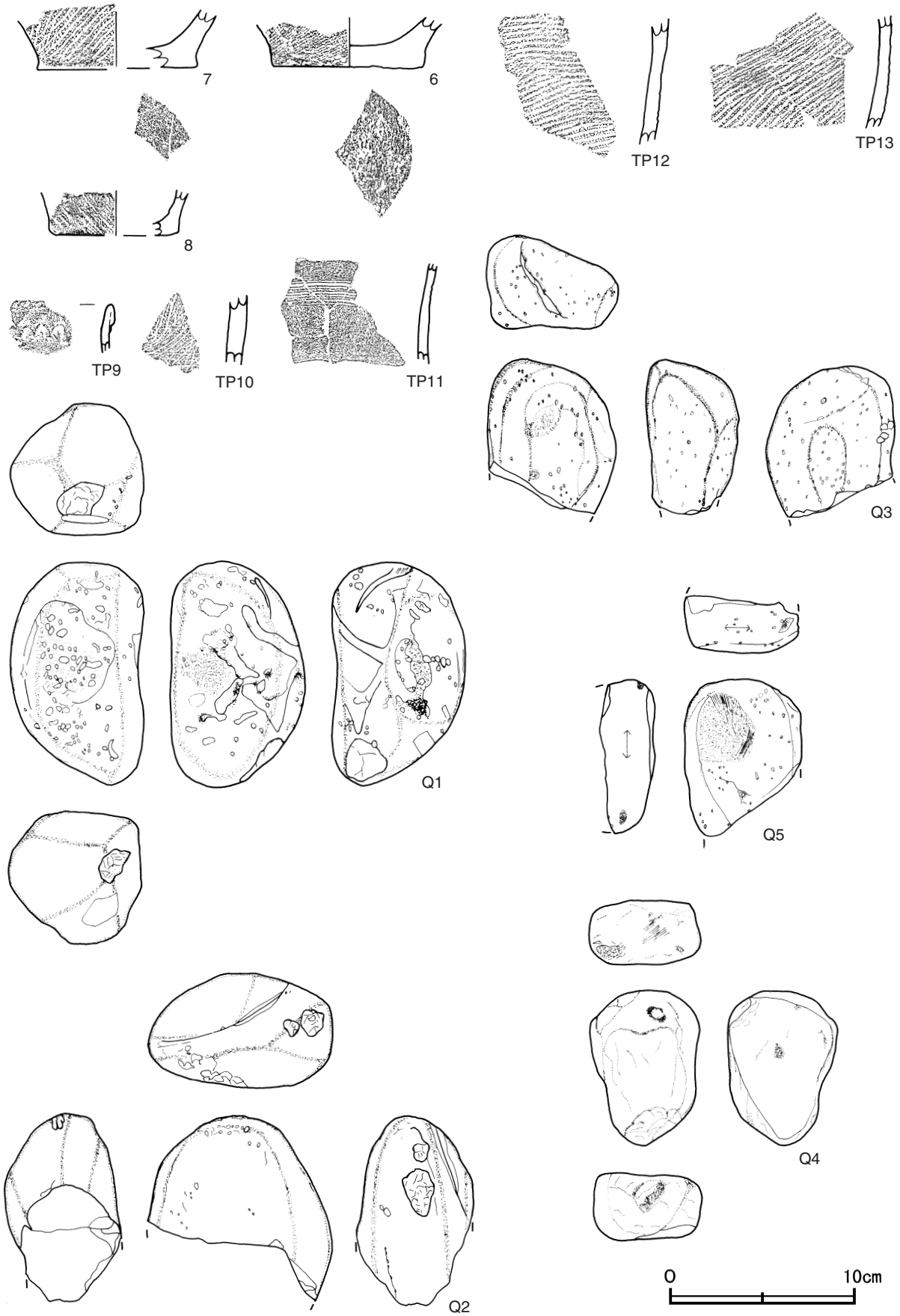
位置　調査区中央部のＦ５a1区，標高27.1mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　長軸5.47m，短軸5.30mの方形で，主軸方向はＮ－18°－Ｗである。壁高は２～11cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がややくぼんでいる。



第11図　第１号住居跡実測図



第12図　第１号住居跡出土遺物実測図

炉　ほぼ中央部に設けられている。長径60㎝，短径50㎝の楕円形で，床面を20㎝ほど掘り込んだ地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
1　赤　褐　色　ロームブロック・焼土粒子中量，炭化粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック・焼土粒子中量，炭化粒子微量
3　黄　褐　色　ロームブロック多量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ56～64㎝で，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ20㎝ほどで，南壁寄りのほぼ中央部で，炉と対峙しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　３層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　褐　　色　ローム粒子多量

遺物出土状況　弥生土器片120点（広口壺），石器13点（敲石10，磨石３），ペグマタイト産石英片420点が出土している。弥生土器片（口縁部７点，体部110点，底部３点）は，全体に散在した状態で出土している。TP９～TP13及びQ２・３は，それぞれ床面から出土している。ペグマタイト産石英片は，炉内及びその周辺を中心に全体から出土しており，総重量は1079.4ｇである。この他に，混入した縄文土器片１点，土師器片２点，陶器片３点が出土している。

所見　時期は，出土土器から後期前半と考えられる。また，この第１号住居跡から出土したペグマタイト産石英片は，今回確認された４軒の弥生時代の住居跡の中で最も多い。

第１号住居跡出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　考
6	弥生土器	壺	－	(2.8)	〔8.0〕	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文　底部無文	覆土中	５％
7	弥生土器	壺	－	(3.2)	〔8.6〕	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文　底部木葉痕	中央部床面	５％
8	弥生土器	壺	－	(2.5)	〔7.0〕	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文　底部木葉痕	覆土中	５％

番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　考
TP９	弥生土器	壺	石英	黒	普通	複合口縁　工具による押圧	炉床面	PL8
TP10	弥生土器	壺	長石・赤色粒子	橙	普通	頸部櫛歯状工具による不規則な沈線施文	南東部床面	PL8
TP11	弥生土器	壺	長石	明赤褐	普通	頸部櫛歯状工具による横走文施文	南部床面	PL8
TP12	弥生土器	壺	石英・雲母	明黄褐	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文	北西部下層	
TP13	弥生土器	壺	長石・石英・赤色粒子・雲母	明黄褐	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文	中央部床面	PL8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備　考
Q１	敲石	12.3	7.3	7.2	877	安山岩	両端に敲打痕	覆土中	
Q２	敲石	(10.3)	9.9	6.3	(540)	流紋岩	一部欠損　片端に敲打痕	南部床面	
Q３	敲石	(8.4)	7.1	5.0	(383)	流紋岩	一部欠損　片端に敲打痕	中央部床面	
Q４	敲石	8.5	5.9	3.6	259	砂質変岩	両端に敲打痕	覆土中	
Q５	敲石	(8.6)	6.5	3.1	(194)	流紋岩	一部欠損　片端に敲打痕	覆土中	

表３　第１号住居跡ペグマタイト産石英片出土量

重さ区分	１g以下	1.1～10g	10.1～20g	20.1～30g	30.1～40g	40.1～50g	50.1～60g	60.1～70g	70.1～80g	総数(個)	総重量(g)
個数	278	117	15	4	2	2	1	0	1	420	1079.4

第２号住居跡（第13・14図）

位置　調査区中央部のＥ４c8区，標高27.2ｍの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　長軸5.08m，短軸3.75mの隅丸長方形で，主軸方向はＮ－73°－Ｅである。壁高は５～８㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がややくぼんでいる。

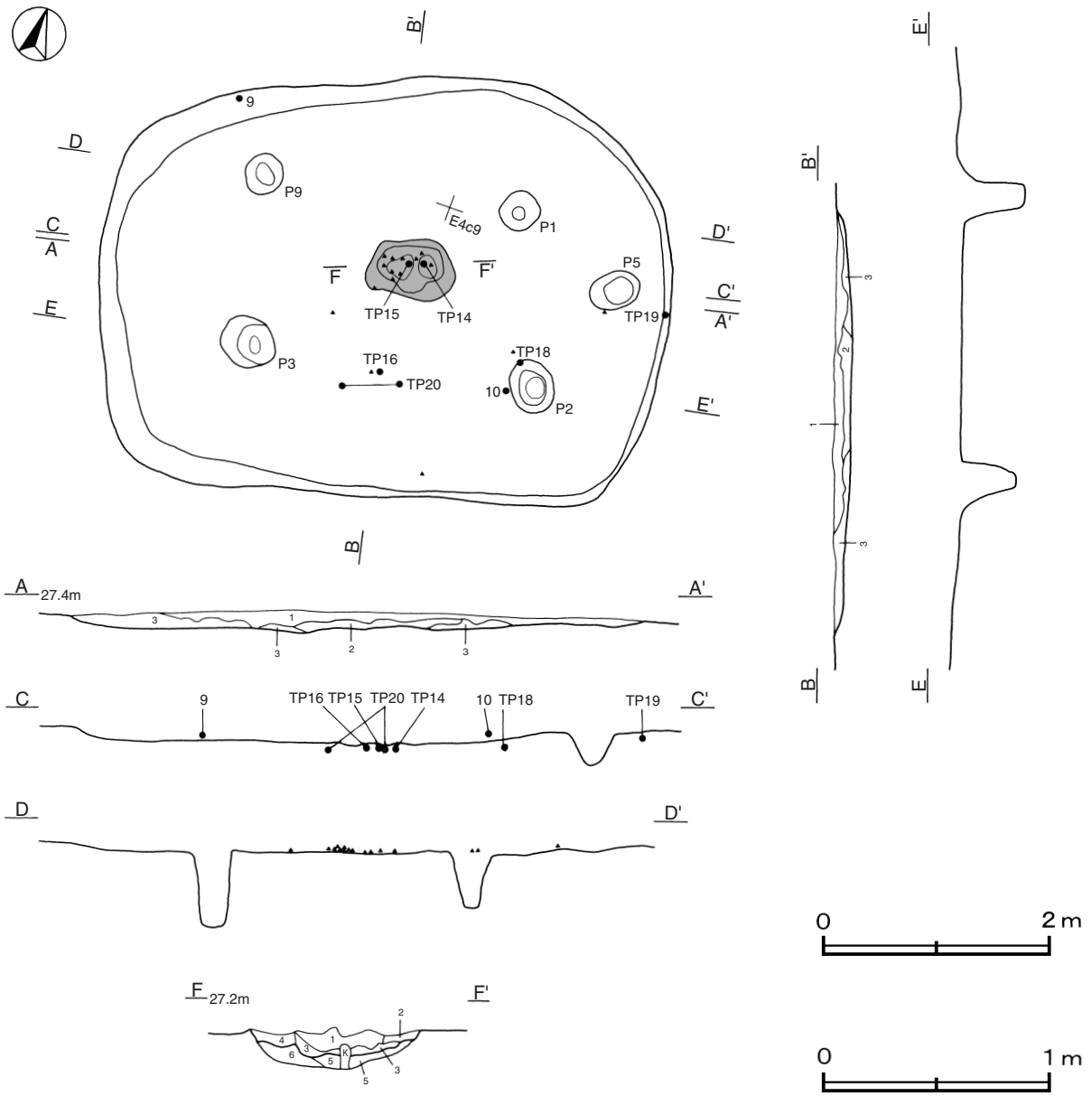
炉　ほぼ中央部に設けられている。長径80㎝，短径60㎝の楕円形で，床面を15㎝ほど掘り込んだ地床炉である。炉床は火熱を受け，わずかに赤変硬化している。

炉土層解説

1	にぶい赤褐色　焼土粒子多量，炭化物少量，ローム粒子微量	4	暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗　褐　色　炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子微量	5	褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3	にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量	6	褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ51～66㎝ほどで，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ27㎝で，南壁寄りのほぼ中央部で，炉と対峙しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　３層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

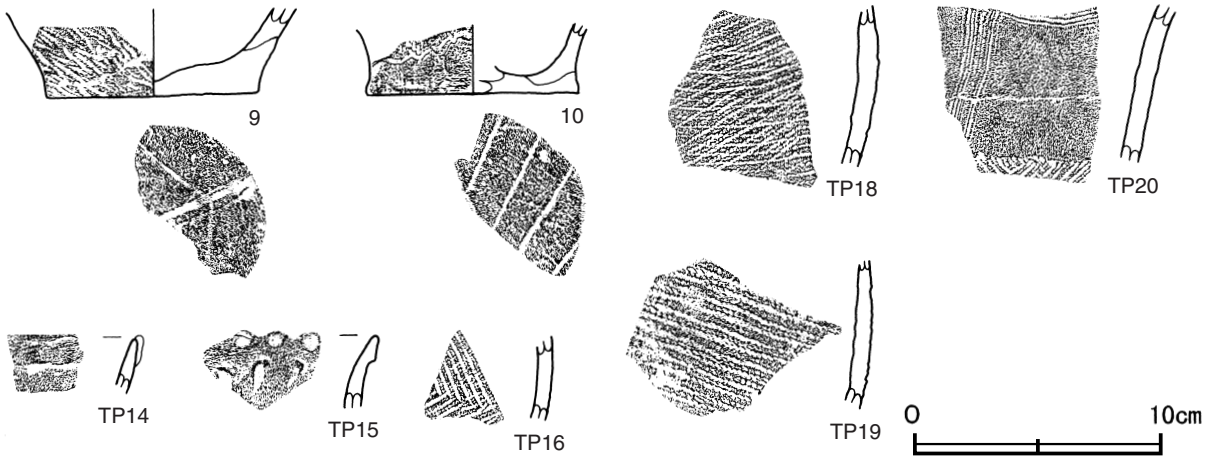


第13図　第２号住居跡実測図

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量　　3　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　弥生土器片150点（広口壺），石器（敲石６点），ペグマタイト産石英片33点が出土している。弥生土器片（口縁部２点，体部144点，底部４点）は，中央部を中心に全体に散在した状態で出土している。Ｐ９・10は覆土の下層より出土している。TP14・15は炉内からの出土である。ペグマタイト産石英片は炉内から多く出土しており，総重量は44.7ｇである。この他に混入した縄文土器片16点，土師器片３点，須恵器片１点，陶器片１点が出土している。

所見　時期は，出土土器から後期前半と考えられる。



第14図　第２号住居跡・出土遺物実測図

第２号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　　考
9	弥生土器	壺	－	(3.5)	〔8.4〕	石英･雲母	にぶい黄褐	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文　底部木葉痕	北西部下層	５％
10	弥生土器	壺	－	(2.8)	〔8.4〕	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	胴部下端無文　輪積痕　底部木葉痕	南東部下層	５％

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　　考
TP14	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部複合口縁　複合部無文	炉床面	PL8
TP15	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部工具による押圧　口縁部棒状工具による押圧	炉床面	PL8
TP16	弥生土器	壺	長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文を羽状に施文	南部床面	PL8
TP18	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文後方向を変え施文	南東部床面	
TP19	弥生土器	壺	石英	にぶい褐	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文	東部床面	
TP20	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	頸部櫛歯状工具による横走文施文後，櫛歯状工具（10本櫛歯）の縦走文施文　胴部附加条一種（附加２条）縄文を施文後方向を変え施文	南部床面	PL8

表４　第２号住居跡ペグマタイト産石英片出土量

重さ区分	１g以下	1.1～10g	10.1～20g	20.1～30g	30.1～40g	40.1～50g	50.1～60g	60.1～70g	70.1～80g	総数(個)	総重量(g)
個数	23	10	0	0	0	0	0	0	0	33	44.7

第３号住居跡（第15図）

位置　調査区中央部のＤ４h0区，標高27.1ｍの台地の平坦部に位置している。

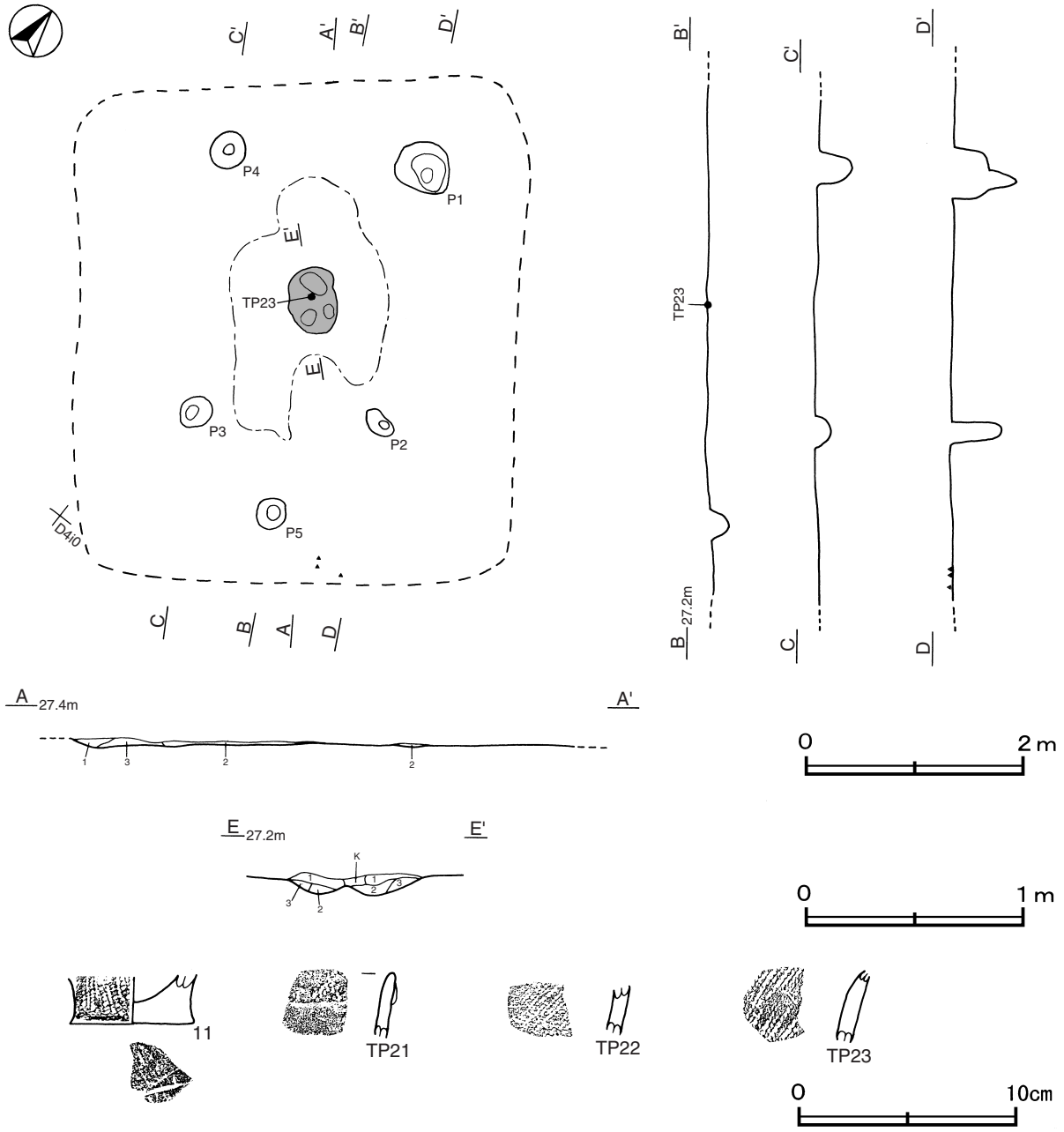
規模と形状　確認時に覆土はほとんど削平されており，壁を検出することはできなかった。炉，柱穴，硬化面

の範囲から住居と判断した。規模は，長軸4.65m，短軸4.15mほどの長方形と考えられる。主軸方向は，N－40°－Wである。

床　残存部は，ほぼ平坦である。炉の周囲が硬化している。

炉　ほぼ中央部に設けられている。長径60cm，短径40cmの楕円形で，床面を10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は火熱を受け，赤変硬化している。

炉土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量



第15図　第３号住居跡・出土遺物実測図

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ14～58㎝ほどで，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ18㎝で，南壁寄りのほぼ中央部で，炉と対峙しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　３層に分層される。ほとんど遺存していないため，堆積状況は不明である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　弥生土器片17点（広口壺），ペグマタイト産石英片６点が出土している。弥生土器片（口縁部１点，体部15点，底部１点）は，炉内と南壁際を中心に出土している。TP23は炉内から出土している。ペグマタイト産石英片は南壁際から出土しており，総重量13.0ｇである。この他に混入した鉄滓が１点出土している。

所見　時期は，出土土器から後期前半と考えられる。

第３号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　考
11	弥生土器	壺	－	(2.2)	〔5.5〕	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文　底部木葉痕	覆土下層	５％

番号	種別	器種	胎　土	色　調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　考
TP21	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	明黄褐	普通	口縁部複合口縁　複合部縄文施文	覆土下層	PL８
TP22	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい赤褐	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文	覆土下層	
TP23	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種（附加２条）縄文施文	炉床面	

表５　第３号居住跡ペグマタイト産石英片出土量

重さ区分	1ｇ以下	1.1～10g	10.1～20g	20.1～30g	30.1～40g	40.1～50g	50.1～60g	60.1～70g	70.1～80g	総数（個）	総重量（g）
個数	4	2	0	0	0	0	0	0	0	6	13.0

第５号住居跡（第16～18図）

位置　調査区北部のＣ４d4区，標高27.0ｍほどの台地の縁辺部に位置している。

規模と形状　長軸8.08ｍ，短軸5.07ｍの長方形で，主軸方向はＮ－24°－Ｗである。壁高は８～25㎝で，外傾して立ち上がっている。

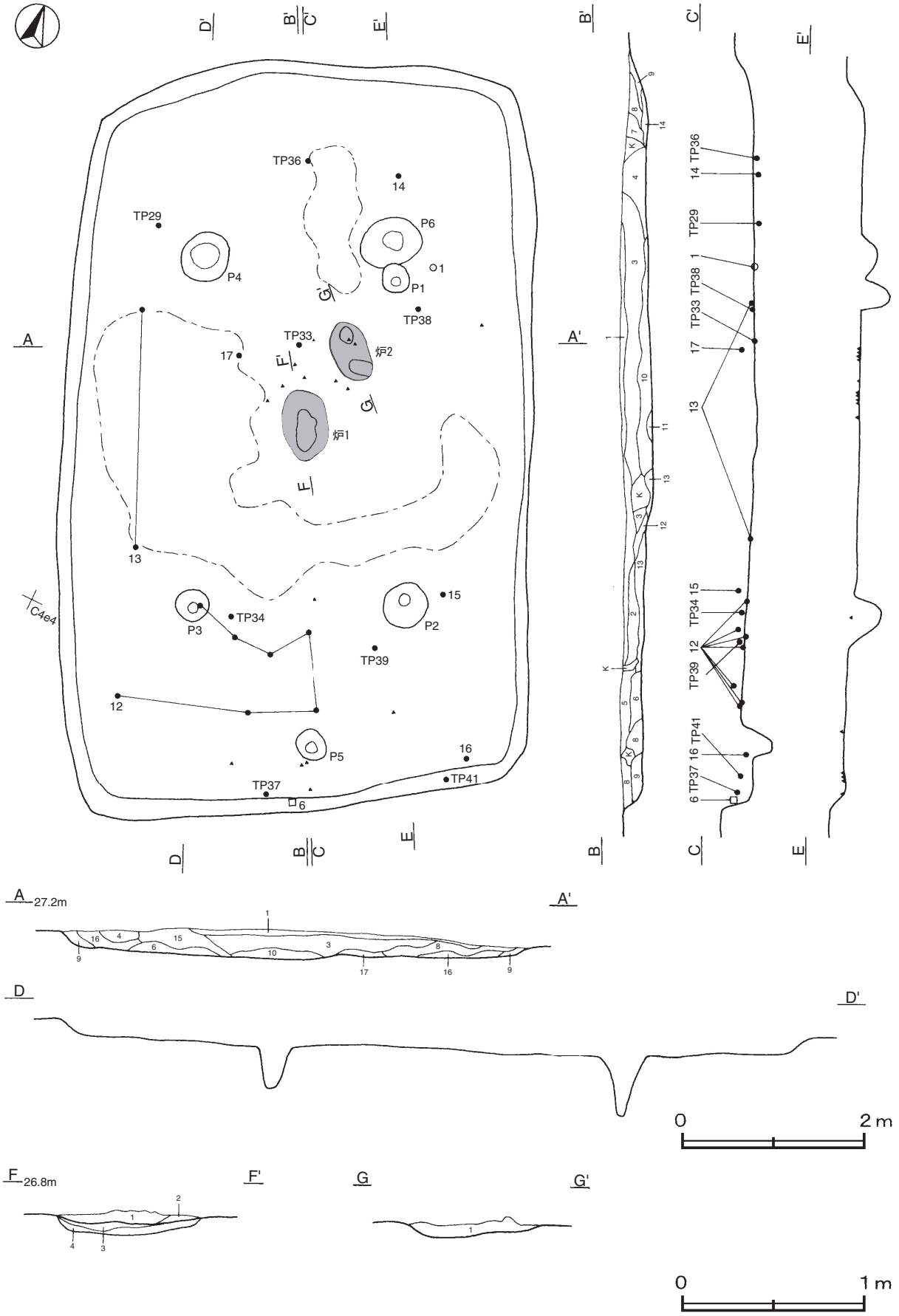
床　ほぼ平坦で，中央部がややくぼんでいる。炉を囲むように硬化している。

炉　２か所。炉１は中央部に位置し，長径80㎝，短径50㎝の楕円形で，床面を14㎝ほど掘り込んだ地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。炉２はやや北東に位置し，長径70㎝，短径40㎝の楕円形で，床面を７㎝ほど掘り込んだ地床炉である。炉床に焼土ブロックの広がりは確認されたが，赤変硬化は認められなかった。ともに同時に機能していたと考えられる。

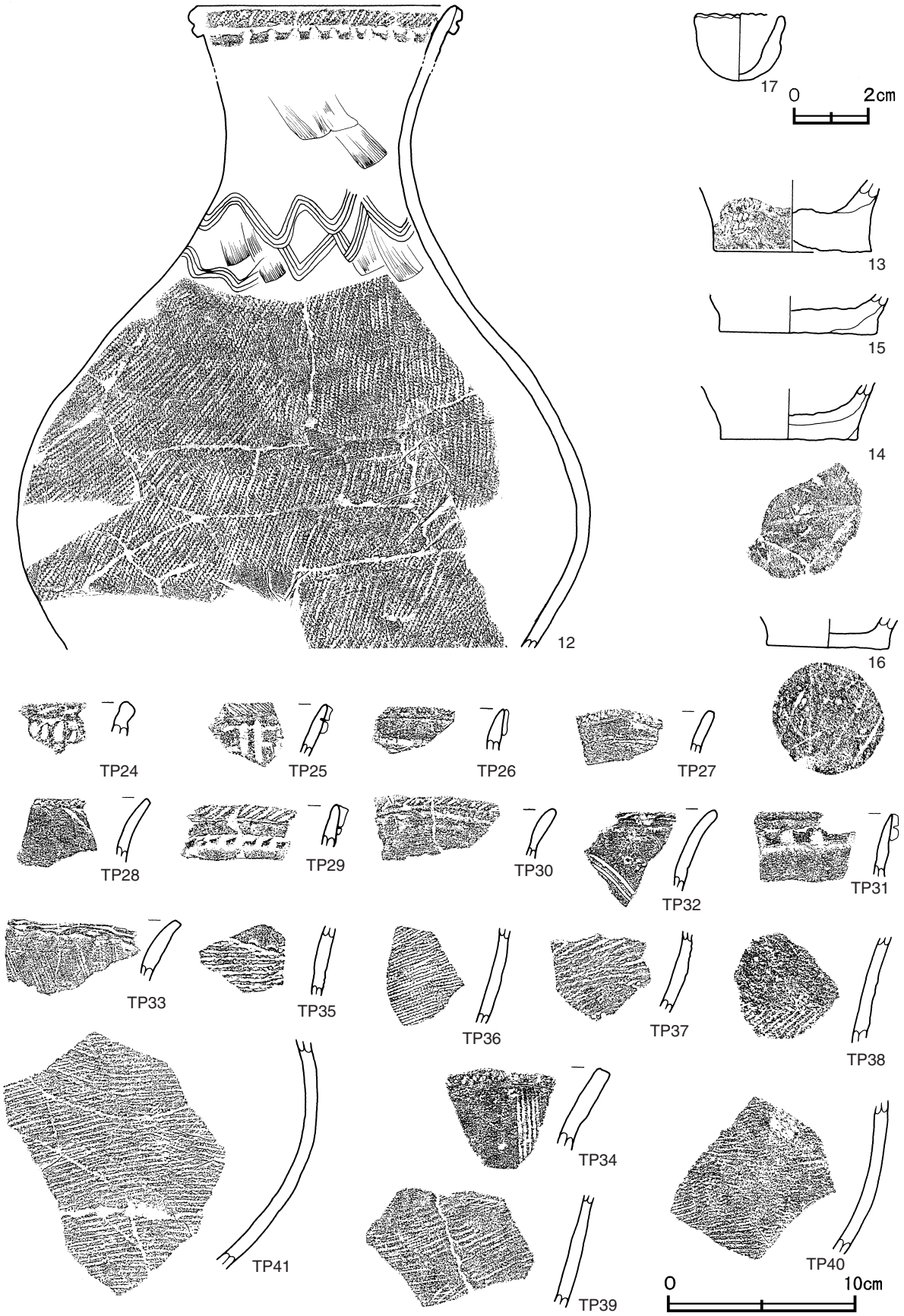
炉１土層解説
1　赤　褐　色　焼土粒子多量，ロームブロック・炭化粒子中量
2　褐　　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量
3　暗 赤 褐 色　焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子少量

炉２土層解説
1　暗　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量

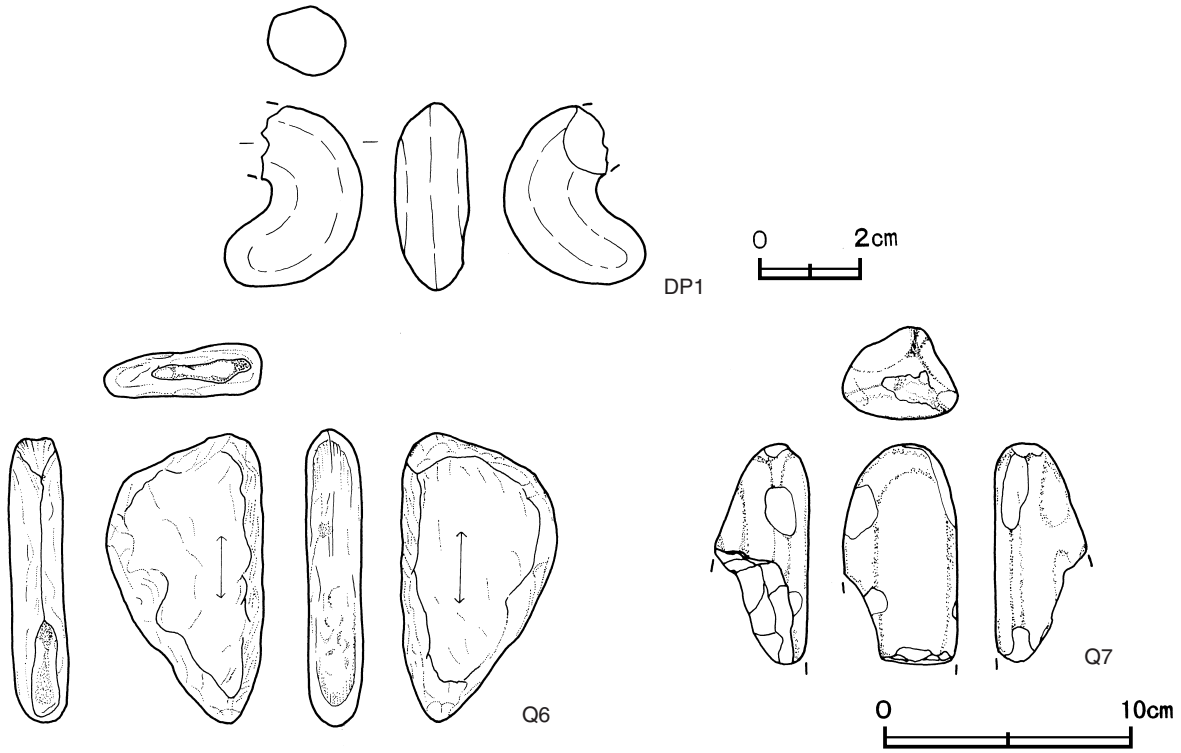
ピット　６か所。Ｐ１～Ｐ４は深さが32㎝～67㎝で，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ６は深さが21㎝で，Ｐ１の北側に隣接しており補助柱穴の可能性が考えられる。Ｐ５は深さ37㎝で，南壁寄りのほぼ中央部で，炉と対峙しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第16図　第５号住居跡実測図



第17図　第５号住居跡出土遺物実測図（1）



第18図　第５号住居跡出土遺物実測図（2）

覆土　17層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量
6　暗　褐　色　ローム粒子微量
7　極暗褐色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
9　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
10　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
11　暗赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子少量・炭化粒子微量
12　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
13　褐　　色　ロームブロック少量
14　黒　褐　色　ローム粒子少量
15　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
16　褐　　色　炭化粒子少量
17　褐　　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量

遺物出土状況　弥生土器片562点（広口壺561，ミニチュア土器１），土製品１点（勾玉），石器23点（敲石２，磨石４，剥片17），ペグマタイト産石英片46点が出土している。弥生土器片（口縁部27点，体部474点，底部61点）は，南壁際を中心に全体に散在した状態で出土している。12は南側の床面から出土しており，出土状況から住居の廃絶時に遺棄され，土圧でつぶれたものと考えられる。DP１は北側の床面から一部が破損した状態で出土している。ペグマタイト産石英片は，炉内及びその周辺から出土しており，総重量は128.6ｇである。この他に混入した縄文土器片12点，土師器片１点，土師質土器片２点，陶器片３点，黒曜石の剥片１点が出土している。

所見　本跡は，確認された弥生時代の住居跡の中で，最大規模で，床面積は約41㎡である。県内の弥生時代の住居跡としても大形のものである。また，ミニチュア土器や土製勾玉などが出土しており，他の住居跡とは性格を異にしている。この集落内で中心的な住居，又は共同の場であった可能性が考えられる。時期は，出土土器及び出土状況から後期前半と考えられる。

第５号住居跡出土遺物観察表（第17・18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　　考
12	弥生土器	壺	〔14.0〕	(35.0)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口唇部縄文施文　口縁部複合口縁　ヘラ状工具で横位に施文後，棒状工具による縦位の押圧　頸部櫛歯状工具（4本櫛歯）による２条の振幅の大きい波状文施文　胴部附加条一種（附加２条）縄文施文	南部床面	50% PL8
13	弥生土器	壺	－	(3.9)	8.4	長石・石英	橙	普通	胴部外面下端ナデ　輪積痕　底部無文	中央部床面	５％
14	弥生土器	壺	－	(2.8)	〔7.5〕	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	胴部外面下端ナデ　輪積痕　底部木葉痕	北西部床面	５％
15	弥生土器	壺	－	(2.0)	〔8.6〕	長石・石英	橙	普通	胴部外面下端ナデ　輪積痕　底部無文	南東部下層	５％
16	弥生土器	壺	－	(1.7)	6.6	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部外面下端ナデ　輪積痕　底部ナデ調整痕	南東部床面	５％
17	弥生土器	ミニチュア土器	(2.4)	1.8	－	長石	橙	普通	体部内外面ナデ	中央部下層	50%　PL8

番号	種別	器種	胎　土	色調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　　考
TP24	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部縄文原体押圧　口縁部複合口縁　棒状工具による押圧	覆土中	PL8
TP25	弥生土器	壺	長石	橙	普通	口唇部縄文施文　口縁部複合口縁　ヘラ状工具で横位に施文後，棒状工具による縦位の押圧	覆土中	PL8
TP26	弥生土器	壺	長石	にぶい褐	普通	口縁部複合口縁　複合部無文	覆土中	PL8
TP27	弥生土器	壺	雲母	黒	普通	口唇部縄文原体押圧　口縁部無文	覆土中	PL8
TP28	弥生土器	壺	長石	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体押圧　口縁部棒状工具による斜位の沈線	覆土中	PL8
TP29	弥生土器	壺	長石・石英	橙	普通	口唇部附加条一種（附加２条）縄文施文　口縁部複合口縁　棒状工具による横位の沈線施文後同工具による斜位の押圧	北西部床面	PL8
TP30	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部縄文原体押圧　口縁部複合口縁　複合部無文	覆土中	PL8
TP31	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部複合口縁　ヘラ状工具による刺突文施文後，押圧	覆土中	PL8
TP32	弥生土器	壺	長石・雲母	黒	普通	口唇部縄文原体押圧　口縁部無文　櫛歯状工具（３本櫛歯）による斜走文施文	覆土中	PL8
TP33	弥生土器	壺	石英	橙	普通	口唇部縄文原体押圧　口縁部無文	中央部床面	PL8
TP34	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	橙	普通	口唇部縄文施文　口縁部櫛歯状工具（５本櫛歯）による縦走文施文	南部下層	PL8
TP35	弥生土器	壺	長石・雲母	黒	普通	頸部附加条一種（軸縄不明）縄文施文	覆土中	
TP36	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部　附加条一種（附加２条）縄文施文	北部床面	PL8
TP37	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	胴部　附加条一種（附加２条）縄文施文	南部下層	PL8
TP38	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	灰褐	普通	胴部　附加条一種（附加２条）縄文施文	中央部床面	PL8
TP39	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部　附加条一種（附加２条）縄文施文	南部下層	
TP40	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部　附加条一種（附加２条）縄文施文	覆土中	PL8
TP41	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部　附加条一種（附加２条）縄文施文	南東部下層	PL8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	手　法　の　特　徴	出土位置	備　　考
DP１	勾玉	(3.7)	2.7	1.5	0.3	(11.8)	粘土	ナデ　穿孔痕有	北東部床面	PL8

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備　　考
Q６	敲石	11.7	6.3	2.3	238	砂質変岩	全側縁に敲打痕　裏表砥面有	南部下層	
Q７	敲石	(8.7)	4.4	3.7	(142)	砂岩	一部欠損　３側縁に敲打痕有	覆土中	

表６　第５号住居跡ペグマタイト産石英片出土量

重さ区分	1g以下	1.1～10g	10.1～20g	20.1～30g	30.1～40g	40.1～50g	50.1～60g	60.1～70g	70.1～80g	総数(個)	総重量(g)
個数	21	22	1	1	1	0	0	0	0	46	128.6

表７　弥生時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	備考(時期・旧→新)
								主柱穴	出入口	ピット	貯蔵穴	炉			
1	F5a1	N－18°－W	方形	5.47×5.30	２～11	平坦	－	4	1	－	－	1	自然	弥生土器（広口壺），敲石，ペグマタイト産石英片	後期前半
2	E4c8	N－73°－E	隅丸長方形	5.08×3.75	５～８	平坦	－	4	1	－	－	1	自然	弥生土器（広口壺），敲石，ペグマタイト産石英片	後期前半
3	D4h0	N－40°－W	〔長方形〕	〔4.65×4.15〕	－	平坦	－	4	1	－	－	1	不明	弥生土器（広口壺），敲石，ペグマタイト産石英片	後期前半
5	C4d4	N－24°－W	長方形	8.08×5.07	８～25	平坦	－	4	1	1	－	2	人為	弥生土器（広口壺，ミニチュア土器），敲石，土製品（勾玉），ペグマタイト産石英片	後期前半

3　古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は，竪穴住居跡１軒が確認され，標高25.0mの台地から谷部への緩斜面に位置している。以下，確認された遺構及び遺物について記述する。

竪穴住居跡

第４号住居跡（第19・20図）

位置　調査区中央部のＥ３i8区，標高25.0mほどの緩斜面に位置している。

規模と形状　長軸5.14m，短軸5.10mの方形で，主軸方向はＮ－22°－Ｅである。壁高は18～32㎝で，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。竈周辺から東壁にかけて赤変しており，焼土・炭化材の広がりが確認された。

竈　北壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで長さ110㎝，袖部幅120㎝である。袖部は，床面と同じ高さを基部として，砂質粘土で構築されている。火床部は平坦で，火床面は火熱により赤変硬化している。煙道は，緩やかに外傾して立ち上がっている。煙道部は壁外に50㎝ほど三角形状に掘り込まれ，火床面から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1	極暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量，ローム粒子少量
2	極暗赤褐色	焼土ブロック多量，炭化物・ローム粒子中量
3	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子微量
4	極暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
5	暗赤褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
7	黒褐色	炭化粒子多量，焼土粒子中量，ローム粒子少量
8	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量
9	暗赤褐色	焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子少量
10	暗赤褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
11	暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子少量
12	暗褐色	焼土粒子多量，ローム粒子中量，炭化物少量
13	暗褐色	焼土粒子多量，砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化物中量
14	褐色	砂質粘土ブロック･ローム粒子多量，炭化物中量，焼土粒子少量
15	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量
16	極暗褐色	ロームブロック・炭化物少量
17	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
18	黒褐色	ローム粒子少量
19	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
20	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量
21	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量，炭化物少量
22	暗赤褐色	焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子中量
23	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物多量，ローム粒子中量

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ42～48㎝で，規模と配置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は深さ15㎝で，南壁寄りのほぼ中央部で，炉と対峙しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

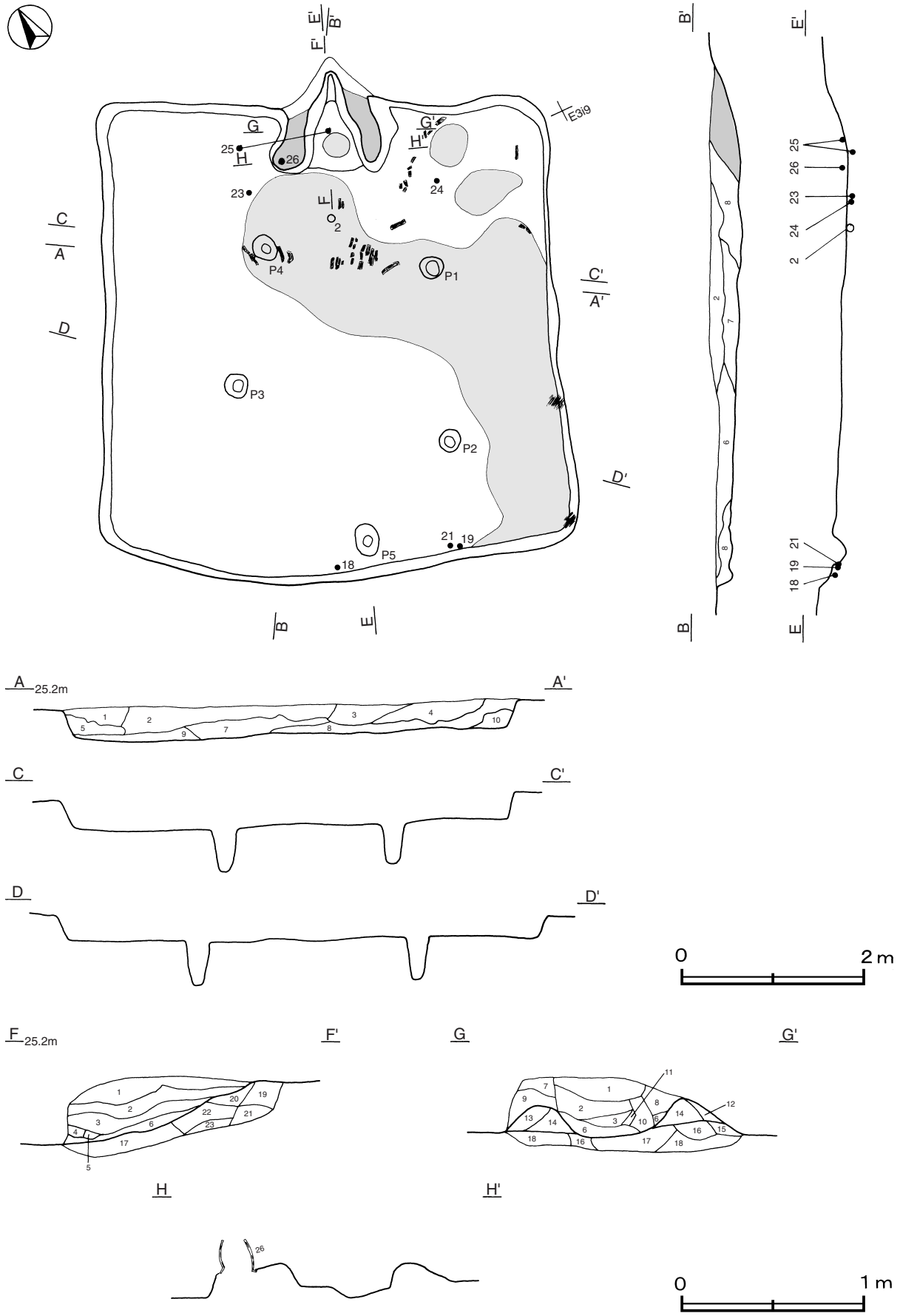
覆土　10層に分層される。各層に多量の焼土や炭化物を含み，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

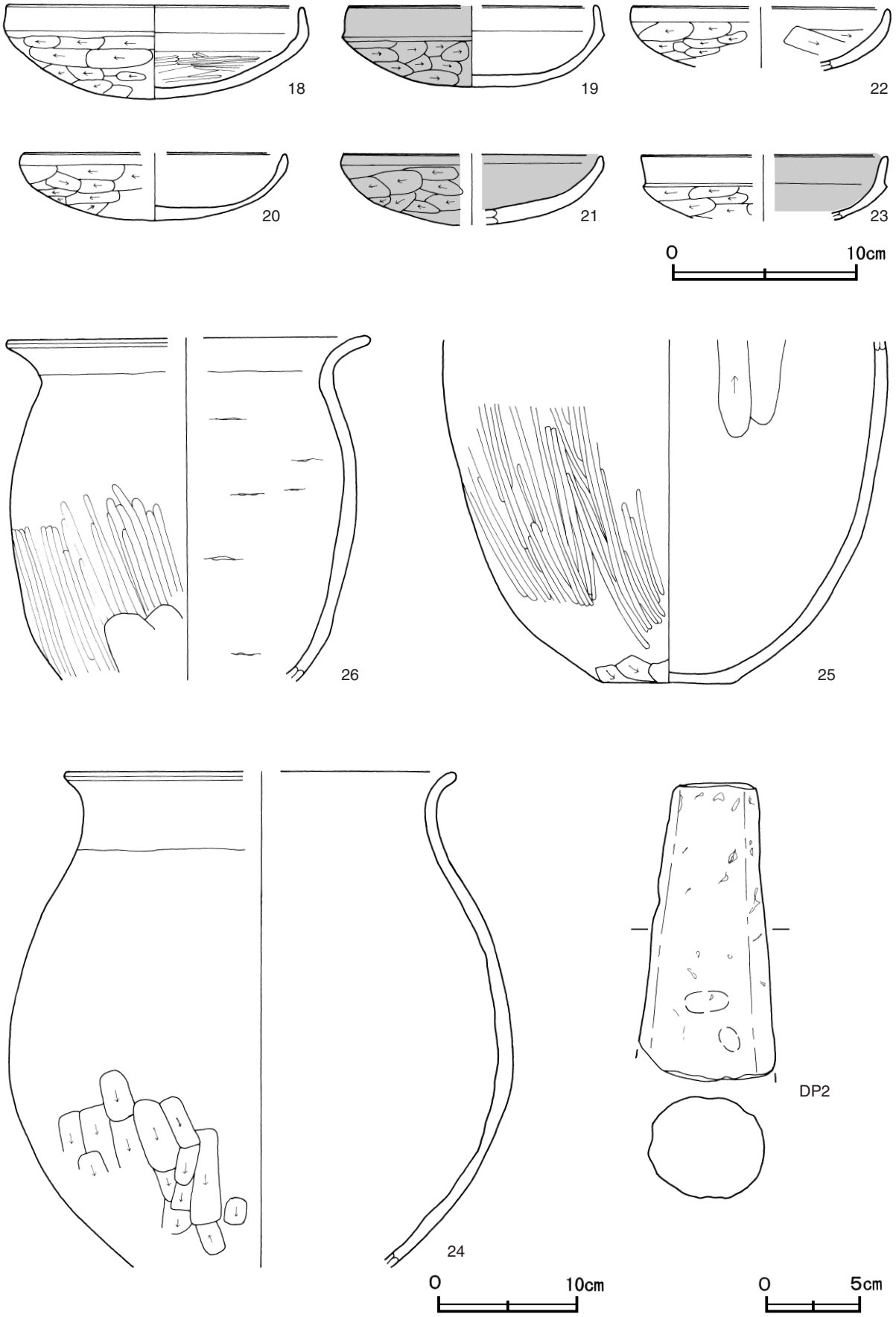
1	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量
4	黒褐色	焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
5	黒褐色	焼土粒子中量，炭化粒子微量
6	黒褐色	焼土ブロック・炭化物・ローム粒子・粘土粒子微量
7	黒褐色	炭化物・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
8	黒褐色	焼土粒子多量，炭化物少量
9	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
10	黒褐色	焼土ブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片354点（坏類67，甕類287），土製品１点（支脚）が出土している。土器片は，竈の周辺を中心に，覆土下層から床面にかけて多く出土している。26は底部が欠損した状態で，竈の袖から逆位で出土している。18は出入り口付近の床面から正位で出土している。ともに住居廃絶時に遺棄されたと考えられる。25は竈西側の床面と竈内から出土した破片が接合したものである。また，竈周辺を中心に，東壁にかけての床面から，焼土・炭化材が出土している。この炭化材は，角材や茅材であることが確認できた。この他に，混入した縄文土器片６点，弥生土器片26点が出土している。

所見　床面の被熱による赤変や炭化材・炭化物の出土状況から，焼失家屋と考えられる。時期は，出土土器から７世紀前葉と考えられる。



第19図　第４号住居跡実測図



第20図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
18	土師器	坏	15.8	5.0	－	長石･石英･赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ　体部外面多方向手持ちヘラ削り　内面磨き	南部床面	95% PL 9
19	土師器	坏	13.4	4.4	－	赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ　体部外面手持ちヘラ削り　外面黒色処理	南東部床面	80% PL 9
20	土師器	坏	〔14.0〕	3.6	－	長石･石英･赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面横ナデ　体部外面多方向手持ちヘラ削り	覆土中	30% PL 9
21	土師器	坏	〔13.8〕	(3.8)	－	長石･石英･赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内外面横ナデ　体部外面多方向手持ちヘラ削り　内外面黒色処理	南東部床面	40% PL 9
22	土師器	坏	〔13.7〕	(3.4)	－	赤色粒子･黒色粒子･雲母	橙	普通	口縁部内外面横ナデ　体部外面手持ちヘラ削り　内面ナデ	覆土中	30%
23	土師器	坏	〔13.1〕	(3.5)	－	長石･赤色粒子･黒色粒子･雲母	にぶい橙	普通	口縁部内外面横ナデ　体部外面手持ちヘラ削り　内面ナデ　内面黒色処理	北西部床面	10%
24	土師器	甕	〔27.7〕	(35.5)	－	長石･石英･白雲母･赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部横ナデ　体部外面下端多方向ヘラ削り　内面剥離痕	北東部床面	40%
25	土師器	甕	－	(24.8)	9.5	石英・長石	橙	普通	体部外面ヘラ磨き　外面下端ヘラ削り　内面ナデ	北西部床面　竈覆土中	50% PL 9
26	土師器	甕	〔19.5〕	(18.5)	－	長石･石英･雲母	橙	普通	口縁部内外面横ナデ　体部外面下端ヘラ磨き　輪積痕	北西部床面	80% PL 9

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	手　法　の　特　徴	出土位置	備考
DP 2	支脚	(16.1)	7.4	4.3	(631)	粘土	指頭痕を残すナデ	北部床面	PL 9

表８　古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(㎝)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	備　考(時期・旧→新)
								主柱穴	出入口	ピット	貯蔵穴	竈			
4	E３i8	N－22°－E	方形	5.14×5.10	18～32	平坦	－	4	1	－	－	1	人為	土師器(坏，甕)，土製品（支脚）	７世紀前葉

４　中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構は，中世の火葬土坑３基，土坑墓５基，近世の溝２条が確認された。それらは標高27.0mの台地の平坦部から緩斜面にかけて位置している。以下，確認された遺構及び遺物について記述する。

(1) 火葬土坑

第１号火葬土坑（SK43）（第21図）

位置　調査区南部のＥ５j5区，標高27.0mほどの台地の平坦部に位置している。

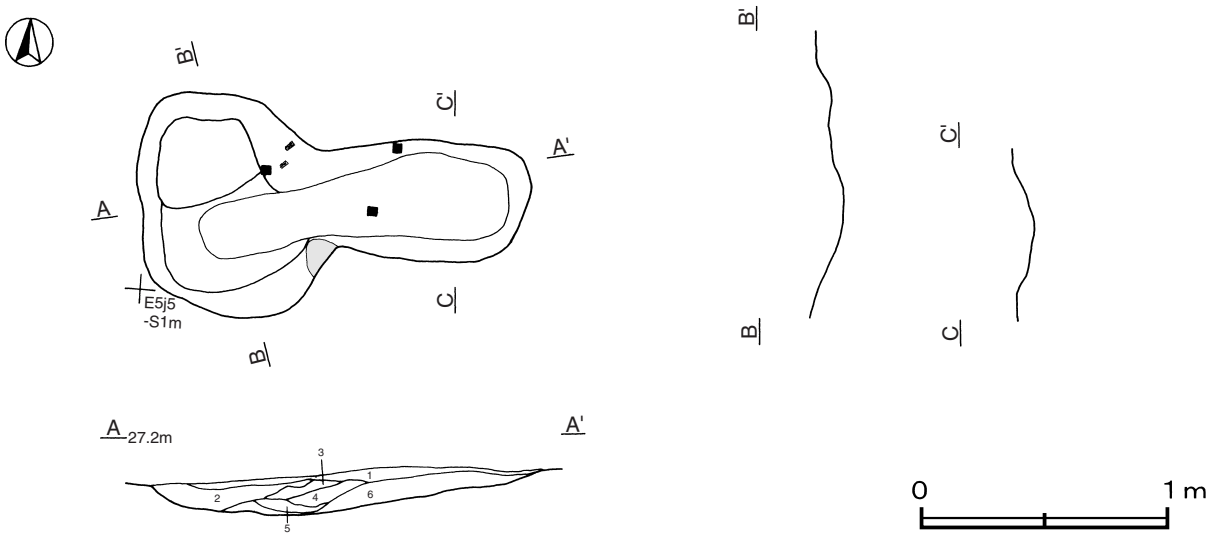
規模と形状　T字状を呈している。燃焼部は長軸0.90m，短軸0.62mの隅丸長方形で，長軸方向はN－11°－Wである。深さは13㎝で，壁は緩やかに立ち上がっている。燃焼部のほぼ中央部に直交する通気溝は，長さ1.51m，幅0.49m，深さ12㎝である。底面は，通気溝が燃焼部を掘り込む形で緩斜している。

覆土　６層に分層される。焼土や炭化物，骨片を含み，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，骨片微量
4　褐　　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・骨片少量
5　暗　褐　色　炭化物中量，ローム粒子少量，炭化物・骨片微量
6　褐　　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況　燃焼部と通気溝の覆土全体から骨片や焼土，炭化物が出土している。

所見　燃焼部及び通気溝から骨片や焼土，炭化物が検出されたことから，遺骸を火葬したものと考えられる。第１～３号火葬土坑は近接しており，本跡を含めた領域が火葬場的領域であったことが推察される。時期は，遺構の形状から中世と考えられる。



第21図　第１号火葬土坑実測図

第２号火葬土坑（SK44）（第22図）

位置　調査区南部のＥ５i5区，標高27.0mほどの台地の平坦部に位置している。

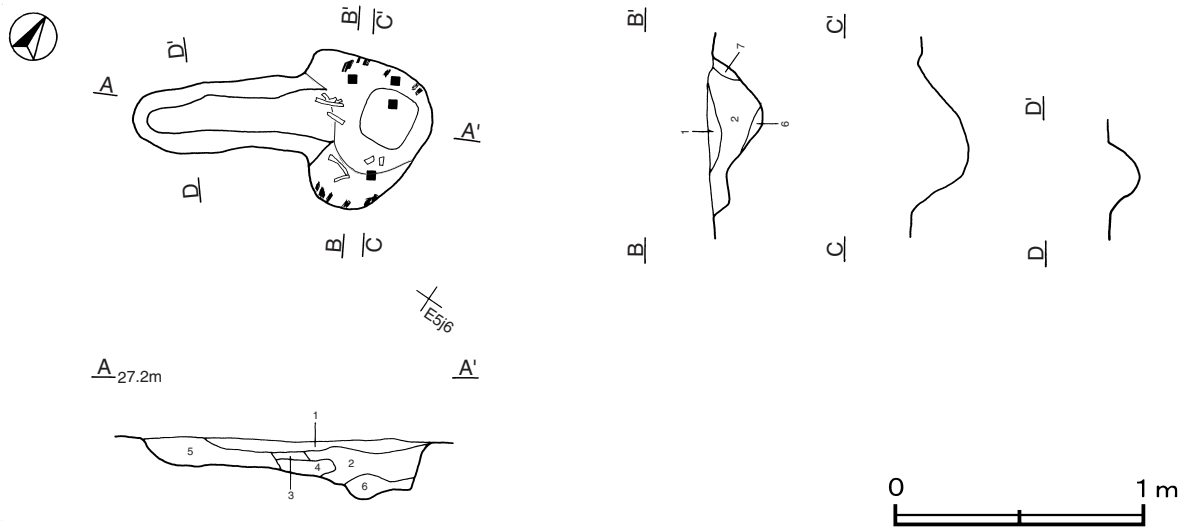
規模と形状　T字状を呈している。燃焼部は長径0.61m，短径0.53mの不定形で，長径方向はN－５°－Wである。深さは21cmで，壁は外傾して立ち上がっている。燃焼部のほぼ中央に直交する通気溝は，長さ1.20m，幅0.30m，深さ11cmである。底面は，通気溝が燃焼部を掘り込む形で緩斜している。

覆土　７層に分層される。焼土や炭化物，骨片を含み，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1	褐　色	ローム粒子多量
2	褐　色	炭化粒子多量，ローム粒子・焼土粒子微量
3	暗褐色	炭化粒子中量，ローム粒子少量，焼土粒子・骨片微量
4	にぶい赤褐色	焼土粒子中量，ロームブロック・炭化物少量，骨片微量
5	灰褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子多量，骨片少量
6	褐　色	ローム粒子多量
7	褐　色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　燃焼部と通気溝の覆土全体から骨片や炭化物が出土している。特に，燃焼部の南北壁際から，骨片と炭化物が集中して出土している。また，燃焼部中央から長さが10cmほどの骨の小破片が出土している。



第22図　第２号火葬土坑実測図

遺存状態が悪く，部位は特定できない。

所見　燃焼部及び通気溝から骨片や骨粉，焼土，炭化物が検出されたことから，遺骸を火葬したものと考えられる。時期は，遺構の形状から中世と考えられる。

第３号火葬土坑（SK45）（第23図）

位置　調査区南部のＥ５i6区，標高27.0ｍほどの台地の平坦部に位置している。

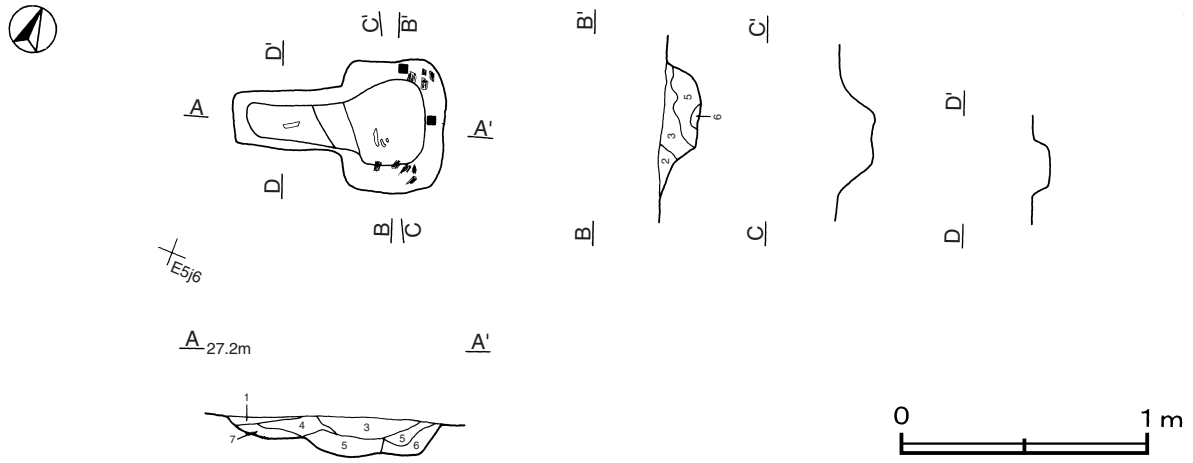
規模と形状　Ｔ字状を呈している。燃焼部は長軸0.51ｍ，短軸0.43ｍの隅丸長方形で，長軸方向はＮ－25°－Ｅである。深さは13㎝で，壁は外傾して立ち上がっている。燃焼部のほぼ中央に直行する通気溝は，長さ0.83ｍ，幅0.22ｍ，深さ４㎝である。底面は，通気溝が燃焼部を掘り込む形で緩斜している。

覆土　７層に分層される。焼土や炭化物，骨片を含み，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・骨片微量
2　黒　褐　色　炭化粒子多量，骨片中量，ローム粒子・焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化物・骨片微量
4　暗　褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子・骨片少量，炭化粒子微量
5　褐　　色　ローム粒子多量
6　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子微量
7　暗 赤 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　燃焼部と通気溝の覆土全体から骨片や焼土，炭化物が出土している。特に，燃焼部の南北壁際から，骨片と炭化物が集中して出土している。また，燃焼部中央から長さが５cmほどの骨の小破片が出土している。遺存状態が悪く，部位は特定できない。

所見　燃焼部及び通気溝から骨片や焼土，炭化物が検出されたことから，遺骸を火葬したものと考えられる。時期は，遺構の形状から中世と考えられる。



第23図　第３号火葬土坑実測図

表９　火葬土坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模							覆土	主な出土遺物	備考（時期・旧→新）
				燃焼部				通気溝					
				長軸×短軸(ｍ)	深さ(㎝)	平面形	壁	長さ(ｍ)	幅(ｍ)	深さ(㎝)			
1	Ｅ５j5	Ｎ−11°−Ｗ	Ｔ字状	0.90×0.62	13	隅丸長方形	緩斜	1.51	0.49	12	人為	骨片･焼土･炭化物	中世
2	Ｅ５i5	Ｎ−５°−Ｗ	Ｔ字状	0.61×0.53	21	不定形	外傾	1.20	0.30	11	人為	骨片･焼土･炭化物	中世
3	Ｅ５i6	Ｎ−25°−Ｅ	Ｔ字状	0.51×0.43	13	隅丸長方形	外傾	0.83	0.22	4	人為	骨片･焼土･炭化物	中世

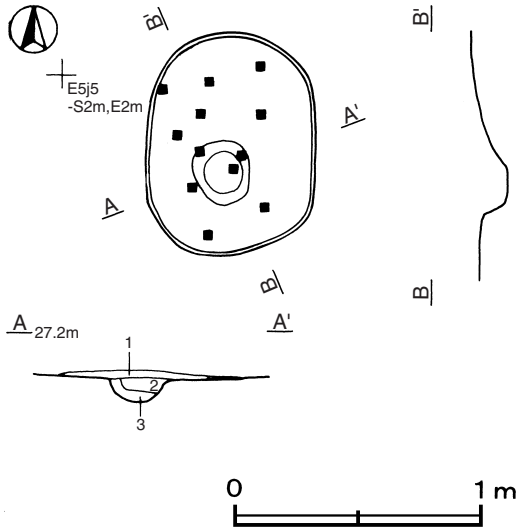
(2) 土坑墓

第１号土坑墓（SK42）（第24図）

位置　調査区南部のＥ５j5区，標高27.0ｍの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　長軸0.89ｍ，短軸0.70ｍの隅丸長方形で，長軸方向はＮ－２°－Ｗである。深さは16㎝で，底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土　３層に分層される。ロームブロックや焼土，炭化物，骨片を含む堆積状況から，人為堆積と考えられる。



土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・骨片微量
2　暗　褐　色　炭化物・骨片中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　骨片が出土している。

所見　骨片が焼土や炭化物とともに出土していることから，火葬骨を埋葬した土坑墓と考えられる。時期を断定できる遺物は出土していないが，土坑墓が集中していることから墓域であった可能性が高いと考えられる。また，古銭が出土している第２号土坑墓に隣接していることから，時期は中世と推定される。

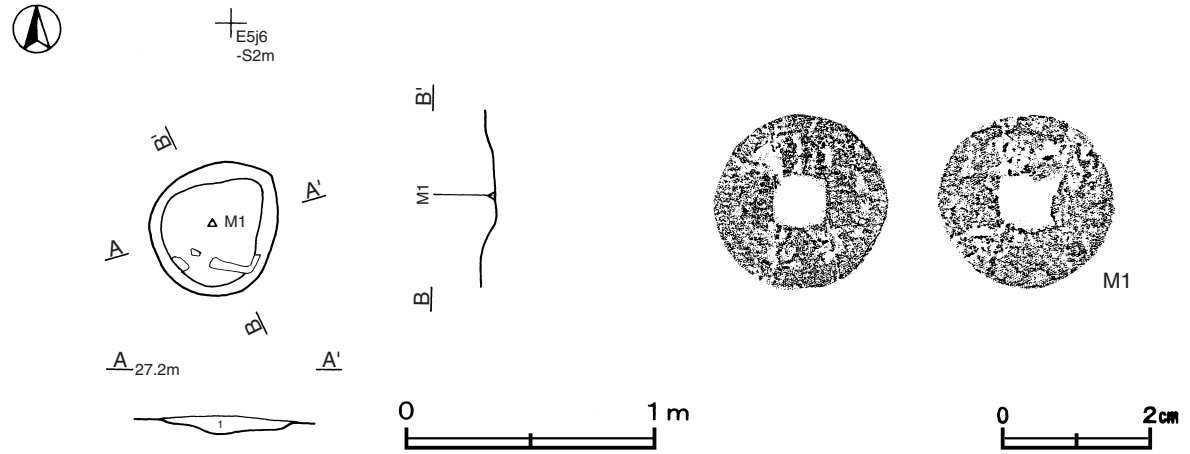
第24図　第１号土坑墓実測図

第２号土坑墓（SK46）（第25図）

位置　調査区南部のＥ５j5区，標高27.0ｍの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　長径0.58ｍ，短径0.52ｍの楕円形で，長径方向はＮ－40°－Ｅである。深さは６㎝で，底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土　単一層で，焼土や炭化粒子，骨片を含む堆積状況から，人為堆積と考えられる。



第25図　第２号土坑墓・出土遺物実測図

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・骨片微量

遺物出土状況　古銭１枚（紹聖元寳）と長さが20㎝ほどの骨の小破片１片が出土している。骨の部位は，形状から大腿骨と考えられる。

所見　骨と副葬銭と考えられる古銭が，焼土や炭化粒子とともに出土していることから，火葬骨を埋葬した土坑墓と考えられる。時期は，出土した古銭から中世と考えられる。

第２号土坑墓出土遺物観察表（第25図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重量	材質	特　　徴	初鋳年	出土位置	備　　考
M１	紹聖元寳	2.39	0.7	0.08	1.4	銅	背面無文	1094年	底面	PL９

第３号土坑墓（SK58）（第26図）

位置　調査区南部のＥ５j5区，標高27.0ｍほどの台地の平坦部に位置している。

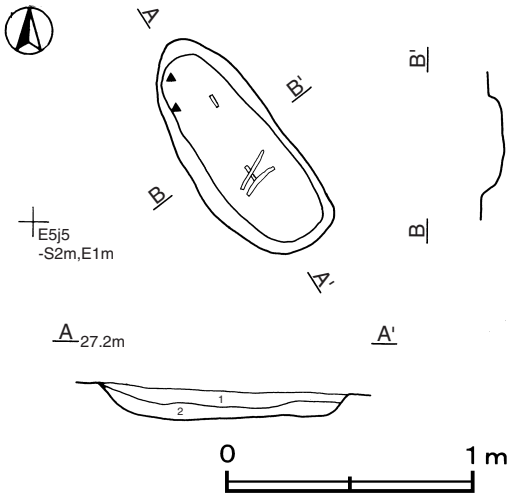
規模と形状　長径0.98ｍ，短径0.43ｍの楕円形で，長径方向はＮ－36°－Ｅである。深さは８㎝で，底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。ロームブロックや炭化物，骨片を含む堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物・骨片微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，骨片微量

遺物出土状況　北西壁際から歯と長さが５㎝ほどの骨の小破片１片，中央部から長さが20㎝ほどの骨の小破片３片が出土している。中央部から出土した骨の部位は，形状から大腿骨と考えられる。

所見　形状及び骨の出土状況から土葬墓と考えられる。また，骨の出土状況から，頭を北西に向けて埋葬した可能性が高いと考えられる。時期は，第２号土坑墓に隣接していることから中世と推定される。



第26図　第３号土坑墓実測図

第４号土坑墓（SK59）（第27図）

位置　調査区南部のＥ５i5区，標高27.0ｍほどの台地の平坦部に位置している。

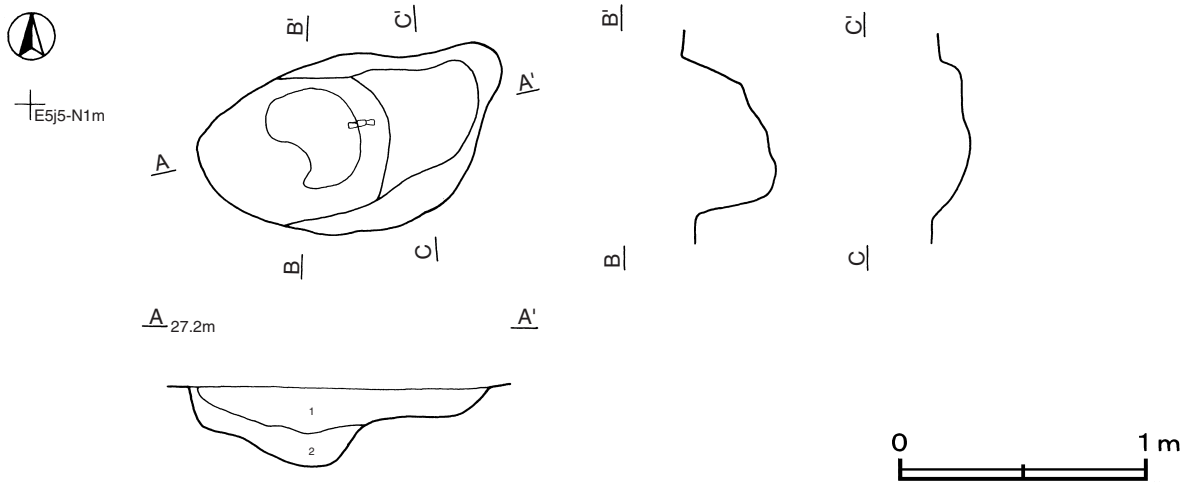
規模と形状　長径1.25ｍ，短径0.74ｍの不整楕円形で，長径方向はＮ－65°－Ｅである。深さは34㎝で，底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　２層に分層される。炭化物や骨片を含む堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化物・骨片微量　　2　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　中央部から長さが10㎝ほどの骨の小破片１片が出土している。遺存状態が悪く，部位は特定できない。

所見　骨片が炭化物とともに出土していることから，火葬骨を埋葬した土坑墓と考えられる。時期は，第２号土坑墓に隣接していることから中世と考えられる。



第27図　第４号土坑墓実測図

第５号土坑墓（SK61）（第28図）

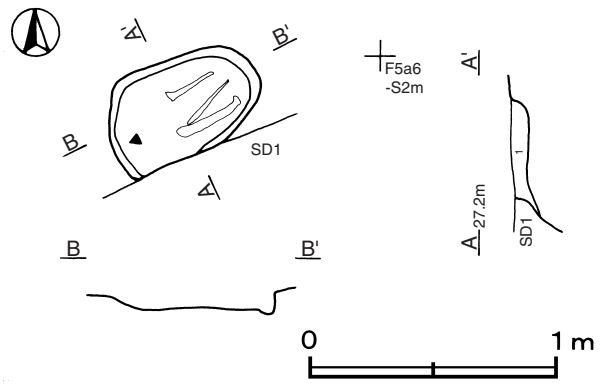
位置　調査区南部のＦ５a5区，標高27.0mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係　南側を第１号溝に掘り込まれている。

規模と形状　長径0.65m，短径0.38mほどの楕円形で，長径方向はN－66°－Eである。深さは10㎝で，底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土　単一層で，炭化物や骨片を含む堆積状況から，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物・骨片微量



第28図　第５号土坑墓実測図

遺物出土状況　南西壁際から歯，中央部から長さが30㎝ほどの骨の小破片３片が出土している。骨の部位は，形状から大腿骨と考えられる。

所見　形状及び骨の出土状況から土葬墓と考えられる。また，骨の出土状況から，頭を南西に向けて埋葬した可能性が高いと考えられる。時期は，第２号土坑墓に隣接していることと近世と考えられる第１号溝に掘り込まれていることから中世と推定される。

表10　土坑墓一覧表

番号	位置	長径方向 長軸方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備　　考 (時期・旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	E5j5	N－2°－E	隅丸長方形	0.89×0.70	16	緩斜	皿状	人為	骨片	中世
2	E5j5	N－40°－E	楕円形	0.58×0.52	6	緩斜	平坦	人為	骨片・古銭（紹聖元寶）	中世
3	E5j5	N－36°－E	隅丸長方形	0.98×0.43	8	外傾	平坦	人為	骨片	中世
4	E5i5	N－65°－E	不整楕円形	1.25×0.74	34	外傾	皿状	人為	骨片	中世
5	F5a5	N－66°－E	楕円形	0.65×(0.38)	10	緩斜	皿状	人為	骨片	中世　本跡→SD1

(3) 溝跡

第1号溝跡（第29図）

位置　調査区南部のG1f5区～E6h4区で，標高27.0mの台地の平坦部から26.5mの緩斜面に位置している。

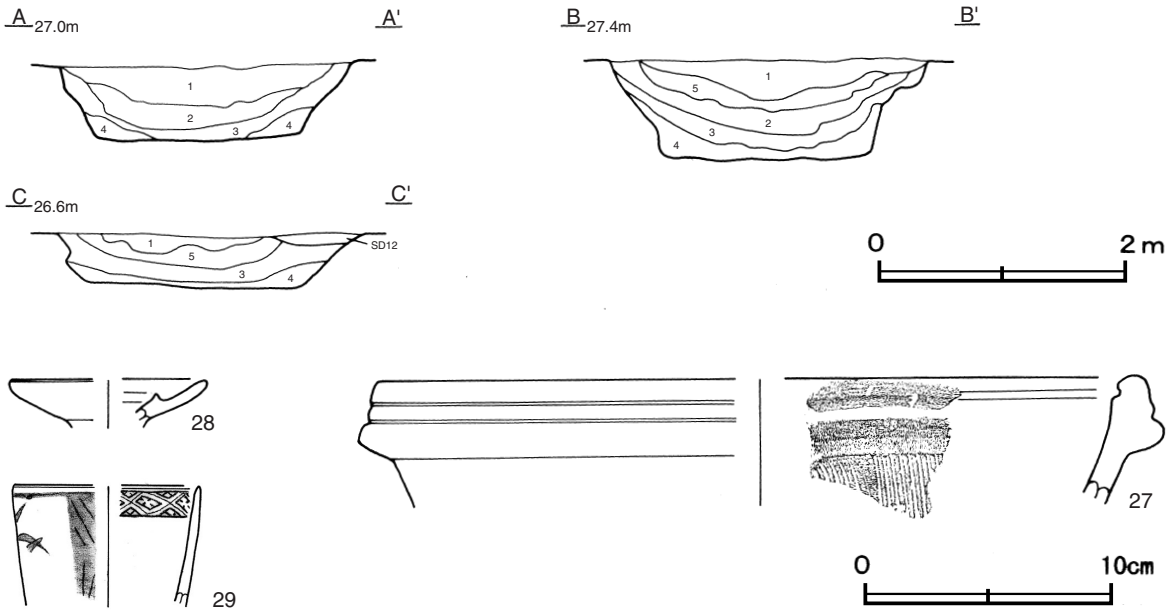
重複関係　第5号土坑墓を掘り込み，第10・11・12号溝，第1・3・91・111号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　G1f5区から東方向(N－70°－E)に直線的にE6h4区まで延びている。確認された長さは，214.8mである。さらに，G1f5区から西方向にも延びていくと推測される。上幅は1.1～3.9m，下幅は0.9～2.1m，深さは40～80cmである。断面は逆台形状を呈している。

覆土　5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子中量
2　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子中量
3　褐　　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量

遺物出土状況　縄文土器片250点（深鉢），弥生土器片6点（壺），土師器片34点（坏類5，甕類29），須恵器片16点（坏類），瓦質土器片1点（擂鉢），陶磁器片24点（椀類15，猪口4，鉢類2，擂鉢2，灯明受皿1），石器6点（石斧1，剥片3，黒曜石片1，ペグマタイト産石英片1），土製品2点（紡錘車）が，遺構全体から



第29図　第1号溝跡・出土遺物実測図

各層に混在して出土している。27～29は覆土上層から出土している。

所見　近世の村境に沿って直線的に延びており，位置と形状から隣村との区画溝と考えられる。時期は，中世の第５号土坑墓を掘り込んでいることから，中世以降に掘られた溝と考えられる。また，18世紀後半の遺物が覆土上層から多く出土していることから，18世紀後半以前に機能していたと考えられる。

第１号溝跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土･色調	施釉	特　　徴	年代	出土位置	備考
27	陶器	擂鉢	〔30.0〕	(5.0)	－	明赤褐	無釉	口縁部内面１条沈線　外面２条沈線　体部内面擂目	18世紀後半	覆土上層	５％　PL9
28	陶器	灯明受皿	〔7.6〕	(1.9)	－	にぶい黄橙	透明釉	油溝切立状　ロクロ成形	18世紀後半	覆土上層	10％　PL9
29	磁器	猪口	〔7.4〕	(4.8)	－	黄	透明釉	体部内外面呉須絵付有	18世紀前半	覆土上層	10％　PL9

第３Ａ・Ｂ号溝跡（第30図）

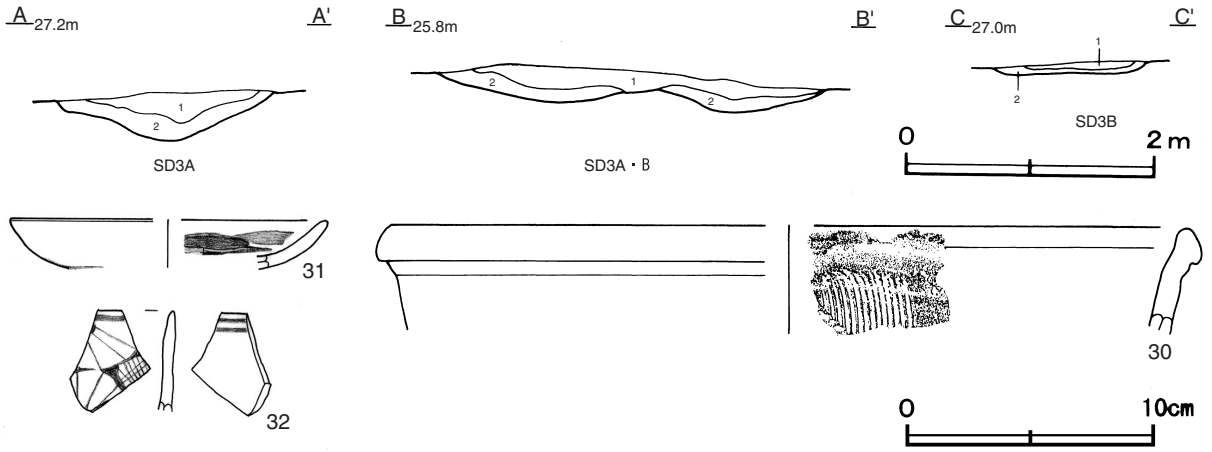
位置　調査区東部のＤ４e9区～Ｅ５g9区で，標高26.2～26.7mほどの緩斜面に台地の縁辺部を囲むように位置している。

重複関係　第57号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　第３Ａ号溝は，Ｄ４e9区から東方向（Ｎ－75°－Ｅ）に直線的に35.0m延び，Ｄ５g7区でほぼ直角に南方向に曲がって12.0m延びている。さらにＤ５i9区でほぼ直角に東方向に曲がり4.0m延びている。形状はクランク状である。第３Ｂ号溝は，Ｄ５i9区から西方向（Ｎ－70°－Ｅ）に直線的に29.0m延び，Ｅ５c3区でほぼ直角に南方向に曲がって21.0m延びている。さらに，Ｅ５h5区でほぼ直角に東方向に曲がり，16.0m延びている。形状はコの字状である。第３Ａ号溝と第３Ｂ号溝は，Ｄ５i9区で合流している。第３Ａ号溝は長さ51.0m，上幅0.50～1.80m，下幅0.20～1.10m，深さ10～45cmで，第３Ｂ号溝は長さ66.0m，上幅0.90～1.70m，下幅0.30～0.90m，深さ20～40cmで，断面はともに弧状を呈している。

覆土　２層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量　　2　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量



第30図　第３Ａ・Ｂ号溝跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　縄文土器片33点（深鉢），土師器片135点（坏類６，甕類128，椀１），須恵器片３点（坏類），陶磁器片44点（椀類31，壺類５，擂鉢５，猪口１，皿１，徳利１），瓦片２点，鉄滓10点が，遺構全体から各層に混在して出土している。30～32は，覆土中から出土している。

所見　２条の溝跡からなるが，位置と形状，覆土，出土遺物から，それらは時期及び性格が同じ溝と判断した。本跡は，形状から地境の区画溝と考えられる。また，東西に延びる第１号溝跡と東西の軸線が平行しており，出土遺物も同様であることから同時期に存在していたと考えられる。時期は，第１号溝との関係と出土遺物から，18世紀後半以前に機能していたと考えられる。

第３Ａ・Ｂ号溝跡出土遺物観察表（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土･色調	施釉	特　　徴	年代	出土位置	備考
30	陶器	擂鉢	〔32.0〕	(4.3)	－	暗赤褐	鉄釉	体部内面擂目	18世紀後半	覆土中	5%　PL9
31	磁器	皿	〔12.6〕	(2.0)	－	灰白	透明釉	体部内面呉須絵付有	18世紀後半	覆土中	5%　PL9
32	磁器	猪口	－	(4.0)	－	にぶい黄橙	透明釉	体部内外面呉須絵付有	18世紀後半	覆土中	5%　PL9

表11　溝跡一覧表

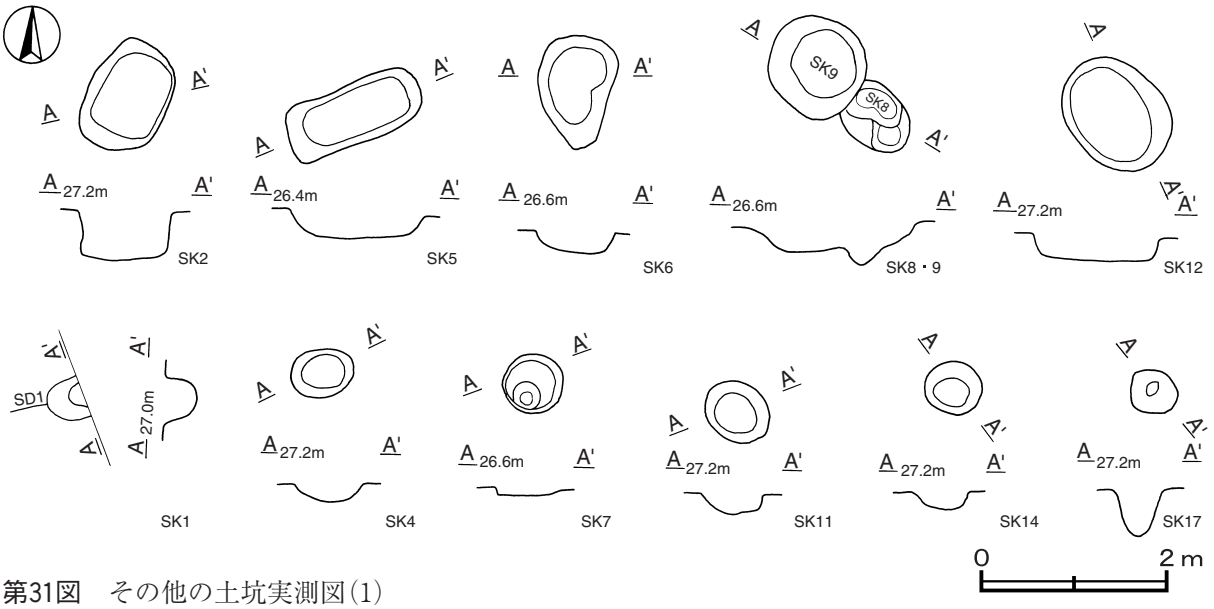
番号	位置	方向	形状	規　　模				断面	覆土	主な出土遺物	備　　考（時期･旧→新）
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
1	G1f5～E6h4	N－70°－E	直線	(214.8)	3.90～1.10	2.10～0.90	80～40	逆台形	自然	石器,縄文土器,土師器,須恵器,陶磁器	近世　SK61→本跡→SD10～12, SK1･3･91･111
3 A･B	D4e9～E5g9	N－60°－E N－20°－W	クランク	113.6	1.90～0.70	0.90～0.20	45～10	弧状	自然	縄文土器,土師器,須恵器,陶磁器	近世　SK57→本跡

5　その他の遺構と遺物

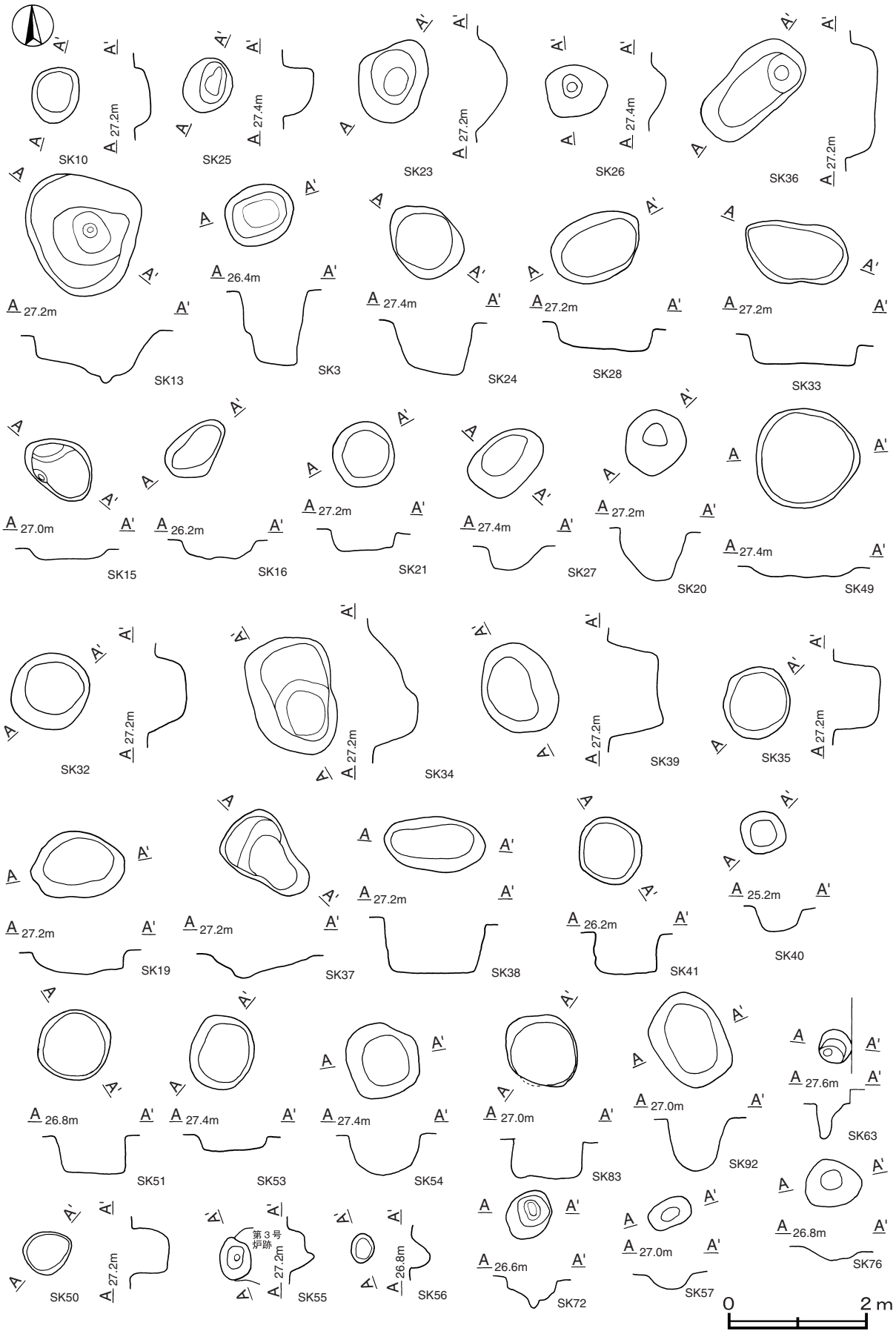
時期不明の遺構は，土坑85基，溝10条，炉跡12基が確認された。また，遺構に伴わない旧石器時代から近世にかけての遺物が出土している。以下，確認された遺構及び遺物について記述する。

(1) 土坑（第31～33図）

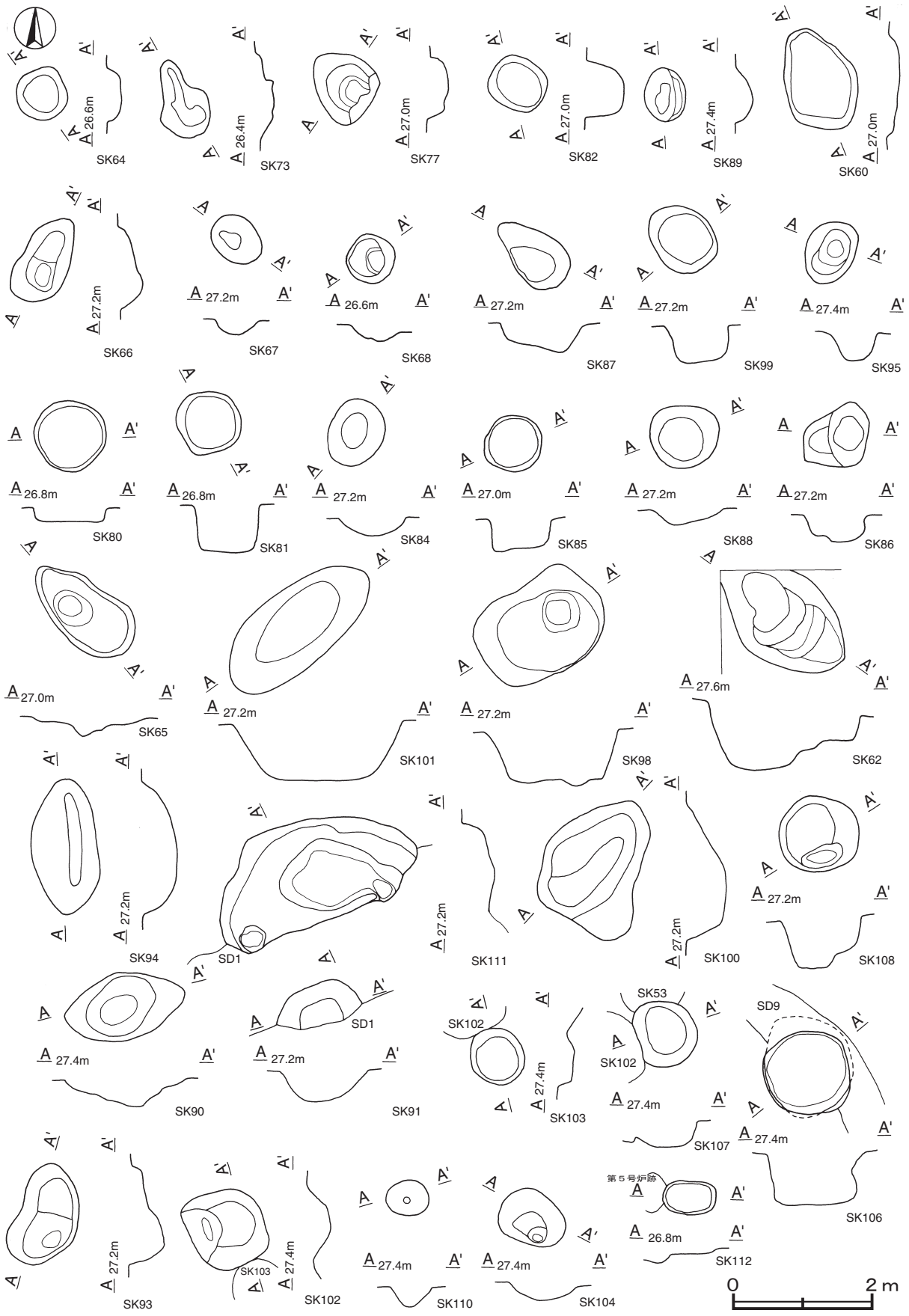
時期及び性格不明の土坑を実測図及び一覧表で掲載する。



第31図　その他の土坑実測図(1)



第32図　その他の土坑実測図(2)



第33図　その他の土坑実測図(3)

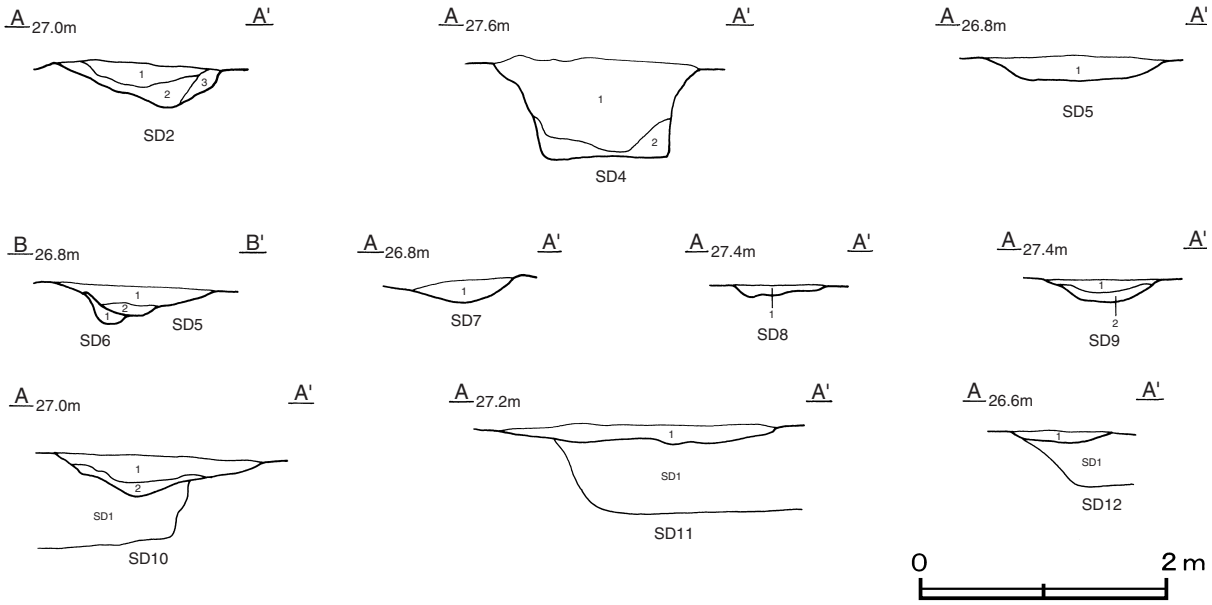
表12　その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向 長軸方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	G 3 b9	－	〔楕円形〕	0.44×(0.38)	32	外傾	皿状	自然		SD 1 →本跡
2	G 2 c4	N－27°－E	隅丸長方形	1.20×0.87	52	外傾	平坦	人為		
3	G 2 c4	N－68°－E	楕円形	1.00×0.82	104	外傾	平坦	人為		SD 1 →本跡
4	F 4 c5	N－70°－E	楕円形	0.75×0.50	25	外傾	平坦	自然		
5	F 3 d7	N－66°－E	長方形	1.50×0.65	30	外傾	平坦	自然	縄文土器	
6	F 3 e8	－	不定形	1.20×0.84	22	外傾	平坦	自然		
7	F 3 d0	－	円形	0.64×0.62	20	外傾	平坦	自然		
8	F 3 d0	N－48°－W	楕円形	0.84×0.62	42	外傾	皿状	自然		本跡→SK 9
9	F 3 d0	－	円形	1.06×1.04	30	外傾	皿状	自然		SK 8 →本跡
10	F 4 c5	N－ 0 °	楕円形	0.80×0.70	26	外傾	平坦	自然	土師器	
11	F 4 c6	N－53°－E	楕円形	0.73×0.63	24	外傾	平坦	自然		
12	F 4 d5	N－45°－W	楕円形	1.30×1.00	30	外傾	平坦	自然	土師器	
13	F 4 b4	N－38°－W	不定形	1.80×1.66	70	外傾	凸凹	人為	土師器	
14	F 4 a4	－	円形	0.60×0.55	20	外傾	平坦	自然		
15	E 4 a2	N－52°－W	楕円形	1.15×0.80	20	外傾	皿状	自然		
16	E 4 i3	N－57°－E	楕円形	1.04×0.66	25	外傾	平坦	自然	土師器	
17	D 4 j4	－	円形	0.48×0.44	50	外傾	皿状	自然	縄文土器	
19	F 4 j7	N－90°－E	楕円形	1.38×0.95	35	外傾	皿状	自然	土師器	
20	E 5 h3	－	円形	0.98×0.90	72	外傾	平坦	自然		
21	E 5 f2	－	円形	0.92×0.90	48	外傾	平坦	自然	縄文土器	
23	D 4 h7	N－32°－E	楕円形	1.30×1.00	40	外傾	皿状	自然	縄文土器	
24	D 4 i9	N－52°－E	楕円形	1.20×0.90	70	垂直	平坦	自然	縄文土器	
25	D 4 h8	－	円形	0.76×0.76	46	外傾	皿状	自然	縄文土器，土師器	
26	D 4 i8	N－80°－E	楕円形	0.90×0.76	20	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
27	D 4 j7	N－52°－W	楕円形	1.12×0.80	35	外傾	平坦	自然	縄文土器	
28	E 5 j6	N－65°－E	楕円形	1.32×0.95	34	外傾	平坦	人為		
32	D 4 h0	－	円形	1.12×1.10	48	外傾	平坦	自然	縄文土器	
33	D 5 g1	N－76°－W	楕円形	1.55×0.85	36	外傾	平坦	自然	土師器	
34	D 5 i2	N－18°－W	楕円形	1.78×1.24	70	外傾	皿状	自然	縄文土器，礫	
35	D 4 g8	N－ 0 °	楕円形	1.10×0.98	66	外傾	平坦	自然	縄文土器	
36	E 5 h2	N－45°－E	隅丸長方形	1.72×0.88	62	外傾	平坦	人為		
37	D 5 i1	N－50°－W	不整楕円形	1.43×0.95	32	外傾	平坦	人為	縄文土器	
38	D 5 j1	N－90°－W	楕円形	1.45×0.80	80	外傾	平坦	自然		
39	E 4 j0	N－36°－W	楕円形	1.35×1.10	78	外傾	平坦	自然		
40	D 5 a6	－	円形	0.64×0.64	38	外傾	平坦	人為		
41	D 5 d5	－	円形	1.02×0.96	58	外傾	平坦	自然	縄文土器	
49	D 4 j8	－	円形	1.50×1.44	18	外傾	平坦	自然	縄文土器	
50	E 4 b0	N－70°－E	楕円形	0.72×0.62	58	外傾	皿状	人為	縄文土器	
51	D 5 f2	－	円形	1.06×1.02	60	垂直	平坦	人為	縄文土器	
53	D 4 j9	N－22°－E	楕円形	1.06×0.92	20	外傾	平坦	自然	縄文土器，土師器	本跡→SK107
54	E 4 b8	N－25°－W	隅丸方形	1.08×1.02	64	緩斜	平坦	人為	縄文土器	
55	D 4 g9	N－ 0 °	楕円形	0.60×0.44	34	外傾	皿状	自然		第３号炉跡→本跡
56	D 4 a4	N－ 0 °	楕円形	0.40×0.36	30	外傾	平坦	自然		
57	E 5 e4	N－66°－E	楕円形	0.66×0.40	21	緩斜	皿状	自然		SD 3 B→本跡
60	D 4 e6	N－26°－W	楕円形	1.56×1.04	18	緩斜	皿状	人為	縄文土器	
62	F 5 f0	N－54°－W	［楕円形］	［2.18］×1.32	90	外傾	凸凹	人為	縄文土器，土師器	
63	F 5 i1	－	円形	0.50×0.48	48	緩斜	皿状	人為		
64	C 4 f6	－	円形	0.76×0.73	21	緩斜	皿状	人為	陶器	
65	D 4 d6	N－46°－W	楕円形	1.74×0.86	18	外傾	皿状	人為	縄文土器	
66	D 4 e6	N－38°－E	楕円形	1.33×0.68	38	外傾	皿状	人為	縄文土器	
67	D 4 d6	N－38°－W	楕円形	0.78×0.62	21	外傾	皿状	人為		
68	C 4 h7	－	円形	0.66×0.64	20	外傾	皿状	人為	土師器	
72	C 4 g7	N－30°－E	楕円形	0.66×0.62	42	垂直	皿状	人為		
73	C 4 g7	N－26°－W	不定形	1.20×0.72	22	緩斜	凸凹	人為		
76	C 4 f6	N－79°－E	楕円形	0.82×0.70	82	緩斜	皿状	自然		
77	D 4 a6	N－46°－W	不定形	1.02×0.92	24	外傾	皿状	人為		
80	D 4 a5	－	円形	1.04×1.04	21	垂直	平坦	人為	縄文土器，石器	
81	D 4 b8	－	円形	0.92×0.92	66	垂直	平坦	自然	縄文土器	

番号	位置	長径方向 長軸方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備　　考 (旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
82	D 4 b5	－	円形	0.86×0.79	59	外傾	平坦	自然	縄文土器	
83	C 4 j5	－	円形	1.06×1.04	54	垂直	平坦	人為	縄文土器	
84	D 4 g5	N－29°－E	楕円形	0.98×0.82	30	緩斜	皿状	人為	土師器	
85	C 4 h3	－	円形	0.83×0.82	44	垂直	平坦	自然		
86	D 4 g6	N－54°－E	不定形	1.10×0.82	40	緩斜	平坦	人為		
87	F 4 j7	N－46°－W	不定形	1.24×0.76	42	外傾	皿状	自然	縄文土器	
88	F 4 j8	－	円形	1.02×0.94	24	緩斜	皿状	自然		
89	F 4 a9	N－ 0 °	楕円形	0.66×0.59	24	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
90	E 4 c6	N－76°－E	楕円形	1.77×0.98	40	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
91	F 5 c1	N－72°－E	[長方形]	1.24×[0.60]	43	緩斜	平坦	自然		SD 1 →本跡
92	E 4 g6	N－29°－W	隅丸長方形	1.36×1.01	80	外傾	平坦	自然	縄文土器	
93	E 4 h8	N－18°－E	楕円形	1.48×0.91	60	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
94	E 4 d5	N－ 0 °	楕円形	1.94×0.93	50	緩斜	皿状	自然	縄文土器，土師器	
95	E 5 j1	N－33°－E	楕円形	0.94×0.70	41	緩斜	皿状	自然		
98	E 4 b4	N－55°－E	隅丸長方形	1.90×1.33	86	外傾	皿状	自然	縄文土器	
99	F 4 b7	N－38°－W	隅丸長方形	1.06×0.86	54	外傾	皿状	人為	土師器	
100	F 4 b9	N－39°－E	不定形	1.96×1.56	56	緩斜	皿状	人為	縄文土器，土師器	
101	F 4 d8	N－55°－E	楕円形	2.48×1.11	48	緩斜	皿状	自然	縄文土器	SD 9 →本跡
102	D 4 j9	N－56°－W	隅丸方形	1.14×1.08	32	緩斜	皿状	自然	縄文土器	SK107→本跡→SK103
103	D 4 j9	－	円形	0.81×0.78	22	外傾	平坦	人為	縄文土器	SK102→本跡
104	D 4 j9	N－51°－W	楕円形	1.00×0.78	48	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
106	E 4 a6	－	円形	1.25×1.20	70	垂直	平坦	人為	縄文土器	本跡→SD 9
107	D 4 j9	N－27°－W	楕円形	0.98×0.84	42	緩斜	平坦	人為	縄文土器	SK53→本跡→SK102
108	E 4 e6	－	円形	1.15×1.10	74	垂直	平坦	人為	縄文土器	
110	D 4 h6	N－85°－E	楕円形	0.62×0.50	28	緩斜	皿状	人為		
111	F 4 e5	N－70°－E	[楕円形]	1.65×(1.25)	62	外傾	皿状	自然		SD 1 →本跡
112	D 4 d7	N－89°－E	隅丸長方形	0.74×0.47	8	外傾	平坦	自然		第 5 号炉跡→本跡

(2) 溝跡（第34図）

時期不明の溝跡を土層断面図及び一覧表で掲載する。



第34図　第２・４～12号溝跡土層断面実測図

第２号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　灰　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量

第４号溝跡土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量

第５号溝跡土層解説
１　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
２　暗　褐　色　ロームブロック少量

第６号溝跡土層解説
１　褐　　色　ロームブロック少量

第７号溝跡土層解説
１　灰　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第８号溝跡土層解説
１　灰　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量

第９号溝跡土層解説
１　暗　褐　色　炭化物・ローム粒子微量
２　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

第10号溝跡土層解説
１　灰　褐　色　ローム粒子微量
２　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量

第11号溝跡土層解説
１　灰　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化物微量

第12号溝跡土層解説
１　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

表13　溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	覆土	主な出土遺物	備考（旧→新）
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
2	D4e9～D5a3	N－42°－E	直線	13.5	1.40～0.70	0.45～0.20	44～30	弧状	自然	縄文土器　土師器 須恵器　鉄滓	
4	F4h9	N－87°－W	直線	(1.80)	1.45～0.90	0.60～0.45	80～65	逆台形	自然	縄文土器	
5	C4h5～C4i7	N－30°－E N－60°－W	コの字	38.70	1.45～0.85	1.00～0.20	30～10	U字状	自然	土師器　陶磁器 瓦　鉄滓	
6	C4h4～C4i7	N－65°－W	直線	12.20	0.45～0.28	0.25～0.10	31	U字状	自然		
7	D4e9～D5a2	N－36°－E	直線	19.70	1.45～0.85	1.00～0.20	20	U字状	自然	縄文土器　土師器 陶磁器　鉄滓	
8	D4g7～E4a4	N－50°－E	直線	17.50	0.82～0.40	0.35～0.15	20～10	弧状	自然	縄文土器　陶磁器	生垣状
9	D4j5～E4e8	N－43°－W N－30°－E	クランク	26.50	1.00～0.60	0.75～0.16	18～10	U字状	自然	縄文土器	本跡→SK106→SK101
10	E4e4～F4f5	N－25°－W	直線	4.70	0.80～0.65	0.45～0.25	33～10	弧状	自然		SD１→本跡
11	E5h6～F5b7	N－20°－W	直線	16.20	0.80～0.50	0.50～0.20	14～６	弧状	自然		SD１→本跡
12	E5h0～E6j1	N－20°－W	直線	10.70	1.00～0.70	0.60～0.40	15～10	弧状	自然		SD１→本跡

（3）炉跡（第35・36図）

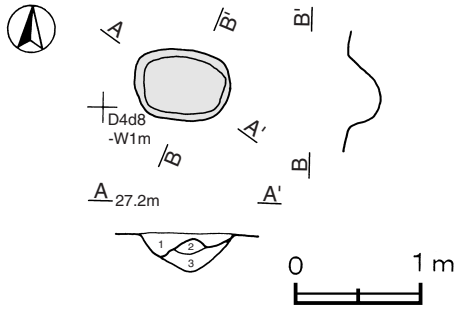
調査区北側の台地の縁辺部を中心に，環状に焼土の広がりが認められた。住居跡の炉と考えたが，床や柱穴は確認できなかった。焼土は，堀りくぼめられた地床炉であり，炉床は赤変硬化が認められた。

第２号炉跡と第５号炉跡からは，縄文土器片が出土しており，縄文時代の屋外炉の可能性も考えられるが，少量の土器片では，明確に判断できなかった。以下において，実測図及び一覧表で掲載する。

第１号炉跡（第35図）

位置　調査区北部のＤ４c7区，標高27.0ｍほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状　長軸0.77ｍ，短軸0.59ｍほどの隅丸長方形で，主軸方向はＮ－89°－Ｗである。深さは30㎝で，炉床面は赤変硬化している。

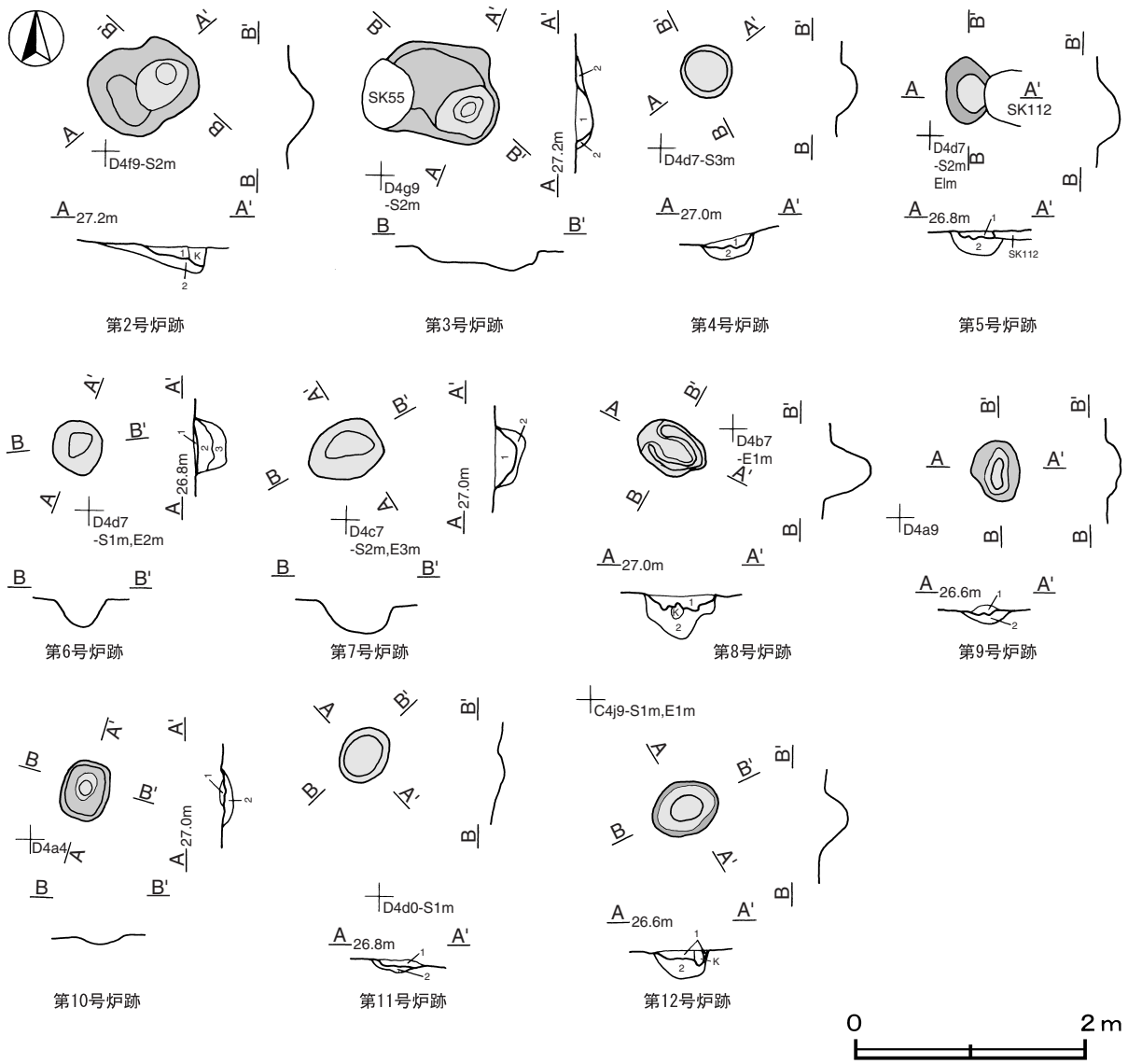


第35図　第１号炉跡実測図

覆土　３層からなり，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

第１号炉跡土層解説
１　にぶい赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
２　にぶい赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子少量
３　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

所見　時期は，本跡に伴う出土遺物がないため不明である。



第36図　第２～12号炉跡実測図

第２号炉跡土層解説
1　褐　　色　焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量

第３号炉跡土層解説
1　褐　　色　焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量

第４号炉跡土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量

第５号炉跡土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

第６号炉跡土層解説
1　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化物微量
2　褐　　色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　にぶい褐色　ローム粒子多量，焼土粒子微量

第７号炉跡土層解説
1　褐　　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量

第８号炉跡土層解説
1　にぶい赤褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量

第９号炉跡土層解説
1　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量

第10号炉跡土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量

第11号炉跡土層解説
1　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子微量
2　にぶい褐色　ローム粒子多量，焼土粒子微量

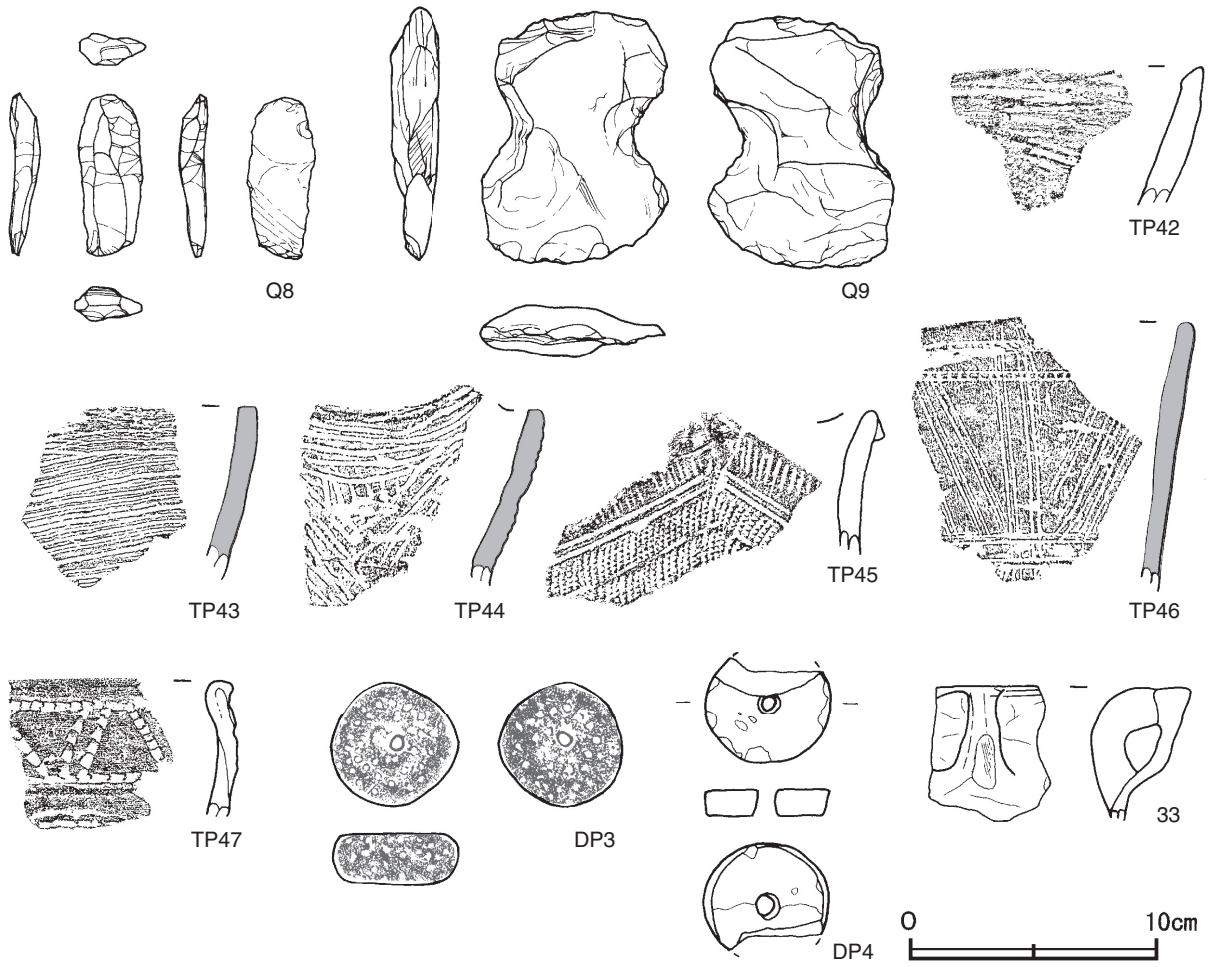
第12号炉跡土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量

表14　炉跡一覧表

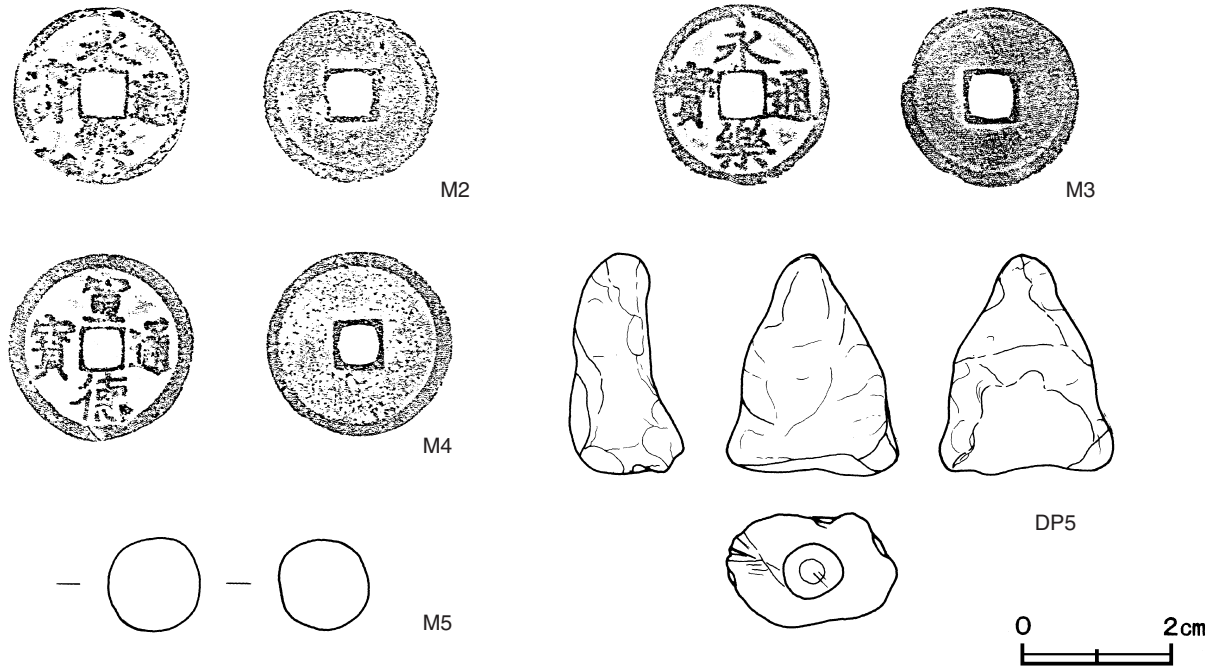
番号	位置	長径方向 長軸方向	平面形	規　　模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備　考 (旧遺構番号･旧→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	D4c7	N－89°－W	長方形	0.77×0.59	30	外傾	皿状	人為		SK78
2	D4i9	N－63°－W	楕円形	0.96×0.74	20	外傾	皿状	人為	縄文土器	SK47
3	D4g9	N－56°－W	不定形	1.12×0.85	19	外傾	皿状	人為		SK48　本跡→SK55
4	D4d7	－	円形	0.44×0.43	18	外傾	皿状	人為		SK69
5	D4d7	N－0°	楕円形	0.58×0.36	22	外傾	皿状	人為	縄文土器	SK70　本跡→SK112
6	D4d7	－	円形	0.42×0.40	28	外傾	平坦	人為		SK71
7	D4c7	N－67°－W	楕円形	0.64×0.51	24	外傾	皿状	人為		SK74
8	D4b7	N－62°－E	楕円形	0.62×0.40	26	外傾	皿状	人為		SK75
9	C4i9	N－8°－E	楕円形	0.51×0.41	10	緩斜	皿状	人為		SK79
10	D4j4	N－13°－W	隅丸長方形	0.51×0.42	8	緩斜	皿状	人為		SK96
11	D4c9	N－35°－W	楕円形	0.50×0.42	20	外傾	皿状	人為		SK97
12	C4j9	N－63°－E	[楕円形]	[0.60]×[0.48]	22	外傾	平坦	人為		SK109

(4) 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物について，特色あるものを抽出し，実測図（第37･38図）及び観察表で掲載する。



第37図　遺構外出土遺物実測図(1)



第38図　遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表（第37・38図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
33	土師質土器	内耳鍋	－	(5.3)	－	雲母･長石	明赤褐	普通	口縁部内外面横ナデ　体部外面煤付着	表土中	PL10

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文　様　の　特　徴	出土位置	備　考
TP42	縄文土器	深鉢	長石･砂粒･雲母	浅黄色	普通	口縁部片　内外面貝殻条痕文	表土中	早期後葉 PL10
TP43	縄文土器	深鉢	長石	にぶい褐	普通	口縁部片　棒状工具による沈線文　繊維含む	表土中	前期中葉 PL10
TP44	縄文土器	深鉢	雲母	褐	普通	口縁部片　棒状工具による沈線文　繊維含む	SK50 覆土中	前期中葉 PL10
TP45	縄文土器	深鉢	長石	にぶい褐	普通	口縁部片　口唇部縦位の貝殻条痕文　突起貼付　連続貝殻文施文後,平行沈線及び沈線施文	表土中	前期後葉 PL10
TP46	縄文土器	深鉢	雲母･砂粒　繊維	褐	普通	口縁部片　半截竹管による縦位,斜位の平行沈線施文後,同工具による横位の平行沈線施文及び2段に半截竹管による爪形文施文　繊維含む	SK81 覆土中	前期中葉 PL10
TP47	縄文土器	深鉢	長石･石英･雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部片　上端と下端を隆帯で区画　区画内を半截竹管による連続刺突文を幾何学上に施文	SK105 覆土中	中期中葉 PL10

番号	器種	径	口径	厚さ	重量	材質	手　法　の　特　徴	出土位置	備　考
DP 3	紡錘車	5.0	0.5	2.0	59.2	粘土	全面竹管状工具による刺突文	SD 1 覆土中	PL10
DP 4	紡錘車	5.0	0.7	1.1	(27.7)	粘土	一部欠損	表土中	PL10
DP 5	土人形	2.9	2.4	1.6	6.6	粘土	底部有孔　摩滅有	表土中	PL10

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特　　徴	出土位置	備考
Q 8	剥片	6.5	2.6	1.3	14.90	チャート	縦長剥片　背面に前段階の剥離面を残し,縁辺に平行して中央に2本の稜線有　縁辺に一部節理面を残す	SD 1 覆土中	PL10
Q 9	石斧	10.1	7.5	1.9	168	安山岩	分銅型	SD 2 覆土中	PL10

番号	銭　名	径	孔径	厚さ	重量	材質	特　　徴	初鋳年	出土位置	備　　考
M 2	永楽通寶	2.40	0.6	0.1	3.6	銅	背面無文	1408年	表土中	PL10
M 3	永楽通寶	2.47	0.6	0.1	3.5	銅	背面無文	1408年	表土中	PL10
M 4	宣徳通寶	2.55	0.6	0.1	3.6	銅	背面無文	1433年	表土中	PL10

番号	器種	径	重量	材質	特　　徴	出土位置	備　　考
M 5	鉛玉	1.24	10.7	鉛	表面灰白色　火縄銃の弾カ	表土中	PL10

第４節　まとめ

当遺跡は縄文時代から近世までの複合遺跡で，縄文時代の土坑６基，弥生時代の竪穴住居跡４軒，古墳時代の竪穴住居跡１軒，中世の火葬土坑３基，土坑墓５基，近世の溝跡２条が確認された。遺物は旧石器時代から，近代まで出土している。なかでも，弥生時代の集落跡が中心であったことが明らかとなった。ここでは，弥生時代の住居跡内から出土している土器及びペグマタイト産石英片に着目しながら各時代を概観し，まとめとしたい。

１　旧石器時代

剥片３点が出土している。他の遺構への流れ込み２点及び遺構外から１点であるが，生活の痕跡を推察することができる。

２　縄文時代

確認された土坑６基は中期末葉から後期前半に位置づけられる。他の遺構への流れ込みや遺構外から出土した縄文土器片は，1,603点にのぼる。出土した土器片は早期から後期まで認められ，特に前期及び後期が多数を占めている。第52号土坑から出土した中期末葉と考えられる甕型の土器は，東北地方南部に多く分布する大木10式と考えられる。この土器が在地のものかどうかは不明であるが，筑波山周辺と東北地方南部との交流をうかがい知ることができる。

以上，出土した土器片から，当遺跡及びその周辺で，早期から後期にかけて人々の生活が継続的に営まれていたことを推察することができる。

３　弥生時代

竪穴住居跡が４軒確認され，谷津が樹枝上に入り込む台地上に小規模な集落を形成していたことがわかった。以下，当遺跡の弥生土器の様相及び住居跡から出土したペグマタイト産石英片について検討していきたい。

(1) 弥生土器について

出土した弥生土器について，各部位ごとの文様の分類を試み，当遺跡における弥生土器の様相を明らかにしたい。

① 口唇部は，縄文原体押圧，縄文施文，無文の３種類に分類できる。縄文原体押圧及び縄文施文の割合が多く，無文はわずかである。

② 口縁部は大きく複合口縁と単口縁に分かれる。複合口縁は棒状工具による押圧，縄文施文，無文の３種類に分類でき，棒状工具による押圧を施したものが大半を占めている。単口縁は，無文と縄文施文に分類でき，無文が大半を占める。

③ 頸部は櫛歯状工具による施文と縄文施文に分類できる。櫛歯状工具による施文は，振幅の大きい波状文，横走文，縦走文，斜走文，不規則沈線にそれぞれ分類できる。

④ 胴部は附加条一種（附加２条）の縄文を斜行に施文しているのがほとんどであり，羽状を呈しているものは破片１点のみ確認できた。

⑤ 底部は，木葉痕，調整痕，無文が確認できた。木葉痕が施されたものが大半を占めている。

以上が，出土した弥生土器の特徴である。その文様の特徴から，後期前半[1]の栃木県から茨城県西部に分布する，従来二軒屋式土器と呼ばれる土器形式と考えられる。二軒屋式土器の出土例は，桜川中流域の他の遺跡においても多く見られ，当遺跡の弥生土器も桜川水系を中心とした文化圏であったことが想定できる[2]。今後，上流域及び下流域との関わりについても検討していく必要があると考えている。

(2) 弥生時代の住居跡出土のペグマタイト産石英片について

確認された4軒の弥生時代の住居跡から，ペグマタイト産石英片が出土している[3]。石英質の礫及び剥片の出土は，原田北遺跡群の西原遺跡において，確認された23軒の住居跡すべてから出土し，その存在が注目されていた。その後，土浦市周辺を中心に県南地域の住居跡内から特徴的に出土していることが指摘されている[4]。

当遺跡では，図11・13・15・16及び表3～6で示したような出土状況及び出土量である。出土状況は，一部削平されている第3号住居跡を除き，炉内及び炉周辺からの出土が多く確認されているが，住居跡内の他の場所からも広く出土していることがわかる。それらが出土している位置は床面からが多く，出土量は各住居跡でばらつきが見られる。しかし，1g以下の細片が多く出土している点では共通している。このような傾向は，他の遺跡でも同様に確認されており，住居跡内から出土するペグマタイト産石英片の出土傾向として捉えることができる。また，第1号住居跡からは，細片420点，出土量1,079.4gで，4軒の中で最も多く出土している。1軒の住居から1,000gを超える出土が確認されているのは，西原遺跡で3軒，下郷遺跡で1軒である。今までに調査された平均的な出土量は100～200g程度であり，他の遺跡の出土量と比べても多量である。このように集落内で極端に出土量の多い住居があることも特徴的なことと言えるであろう。

ペグマタイト産石英片について，破砕方法や使用目的に関して，様々な仮説が提示されている。江幡良夫氏は，西原遺跡において，「簡単な使い捨ての礫器」として使用した可能性を言及している。さらに，炉床上からの出土が多いことにも着目している。当遺跡でも，炉床上及びその周辺から多く確認されており，このペグマタイト産石英片破砕との関連が考えられる。中村哲也氏は，野中遺跡において熱による破砕行為と結びつけるなら「目的は，定型的な剥片ではなく砕片の獲得」としている。ペグマタイトから，石英の部分のみを取り出そうとすれば，熱を加えることにより，他の鉱物との耐熱温度の違いから破砕され，石英を取り出すことが可能である。また，急激な加熱後，水で冷やすなどの急激な冷却で鉱物が破砕することも可能である[5]。炉の周辺からの出土はこのような破砕行為との関連も推察できるが，その使用目的について，関口満氏は，下郷遺跡において，丸みを帯びた自然面と敲き打痕が観察できることから転石を利用した「敲くまたは敲かれる使用法を持つ石器」，黒澤春彦氏は，「この地域の弥生時代の特徴的な生産にかかわる道具」[6]，大淵敦志氏は，六十塚遺跡において「石器関係の生産関連遺跡の可能性」と様々な見解が述べられている。目的については，結論を出すことはできないが，硬質の鉱物である石英を破砕していることから，礫器として生活の中で利用していた可能性や取り出した小破片を何らかの生産に使用した可能性などが想定できるであろう。今後の資料の増加を待ち，さらに検討を加えていきたい。

4　古墳時代

古墳時代の住居跡は，7世紀前葉と考えられる竪穴住居跡1軒が確認された。この住居跡は，台地から谷部への緩斜面に位置している。集落は，調査区の外側に広がっていたものと考えられる。

5　中世

調査区の南部で，火葬土坑3基，土坑墓5基が確認され，墓域が形成されていたことが判明した。火葬土坑は，通気口を持ち，それが燃焼部の長軸に直交するT字型を呈するものである。つくば市周辺では，島名熊の山遺跡，上野陣場遺跡，神田遺跡などで同様の形態が確認されている。また，土坑墓は，火葬墓と土葬墓の2種類が確認され，重複がなくそれらの時期差を判断することはできなかった。しかし，火葬墓から古銭（紹聖元寶）が出土していることや土葬墓が近世の区画溝に掘り込まれていることから，共に中世の墓跡と考えられ

る。両者は，位置的にも隣接し同じ墓域内と考えられ，大きな時期差はないものと推察される。火葬土坑が検出された墓域内に火葬墓と土葬墓が混在している事例は多く，火葬から土葬への転換期にあたる可能性も指摘されている[7]。当遺跡の火葬土坑及び土坑墓の出土状況から同様な時期の可能性があると推察される。

6　近世

溝２条が確認された。その性格は，共に区画溝と考えられる。

第１号溝は，旧玉取村と栗原村の村境に沿って位置している。明治22年の地籍図においても，その位置は，村境となっている。現在も両地区の境界となっていることから，近世においても村境であったことが想定できる。調査時に，底面から砂層は確認されず，壁面に浸食された様子も見られないことから，水が流れていた可能性はなく，両村を区画するために掘られた溝と考えられる。近世において，玉取村と栗原村との間では，絶えず水争いが続けられていたとされており，野境争論も発生している[8]。このことと，この区画溝とに何らかの関係があったことも推察できる。

また，第３Ａ・Ｂ号溝は，地割りの区画溝と考えられる。前述した明治22年の地籍図にも，同様の地割りが見られる。溝などで，境界としたものが，埋没したあとでも，その場が地割りとして残っていくことは，しばしば見られることであり[9]，近世には溝を掘って地割りしていたと考えられる。出土土器が少なく，時期が特定できなかった溝の中にも，同様の性格があった可能性があると考えられる。また，玉取村は16世紀後半の検地において，石高が低率で生産力の低い村であった。17世紀後半には，開発した田畑辻石高が80～90石にのぼり，田畑の開発が盛んに行われていたとされている[10]。そのほとんどが畑であり，この区画溝が台地の開発に伴う地割であった可能性も推察される。

註

1）海老沢稔氏の編年による弥生時代後期Ⅱ期～Ⅲ期と考えられる。
海老沢稔「茨城県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会　2000年1月

2）関口友紀「茨城県西部地域における弥生時代後期の土器について－桜川中流域を中心として－」『日本考古学の基礎研究』茨城大学人文学部考古学研究室　2001年3月

3）独立行政法人産業技術研究所地質標本館館長青木正博氏に鑑定していただいた。
石英質の礫及び剥片について様々な名称での報告がされている。西原遺跡，原出口遺跡，根鹿北遺跡ではアプライト礫及び剥片，下郷遺跡では石英礫破片，六十塚遺跡では石英の剥片，野中遺跡ではペグマタイト製遺物及びペグマタイトの石英質部とされている。それぞれ名称は違うが，石英質で共通しており，出土状況も似ていることから，同様の物として認識されている。本報告書においては，ペグマタイト産石英片という名称を使用する。

4）ａ江幡良夫「土浦工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　西原遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第85集　1994年3月
ｂ江幡良夫「土浦工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　原出口遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第94集　1995年3月
ｃ関口満・福田礼子・吉沢悟・日高慎『根鹿北遺跡・栗山窯跡発掘調査報告書』土浦市遺跡調査会　1997年3月
ｄ小川和博・大淵敦志・鍛冶文博『六十塚遺跡』土浦市遺跡調査会　1998年3月
ｅ中村哲也　『野中遺跡　第2次調査報告書』美浦村教育委員会　2000年3月
ｆ関口満・窪田恵一『下郷遺跡・下郷古墳群』下郷古墳群遺跡調査会　2001年7月

5）青木正博氏のご教示による。

6）黒澤春彦「土浦周辺における弥生時代後期の様相」『土浦市立博物館紀要』土浦市立博物館　2001年3月

7）阿部寿彦『千葉県佐倉市高岡遺跡群Ⅰ』財団法人印旛郡市文化財センター　1993年3月

8）ａ大穂町史編纂委員会『大穂町史』つくば市大穂地区教育事務所　1989年3月
ｂ桜村史編纂委員会『桜村史　下巻』桜村教育委員会　1983年3月

9）橋口定志「町を囲うこと」『月刊　考古学ジャーナル』356　ニューサイエンス社　1993年1月

10）前掲文献８）に同じ

写　真　図　版

遺跡遠景（南西から）

第 29 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 30 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

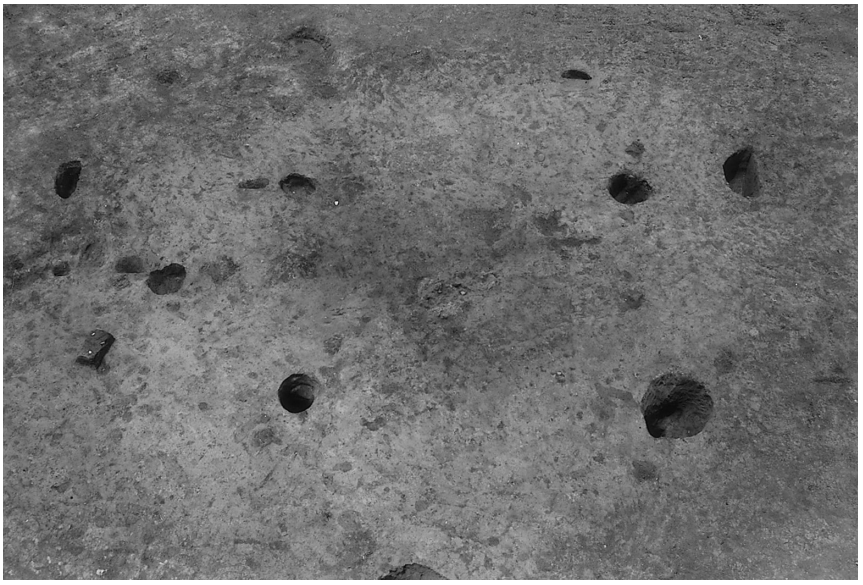
第 52 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

PL 2

第 1 号住居跡
完　掘　状　況

第 1 号住居跡
遺物出土状況

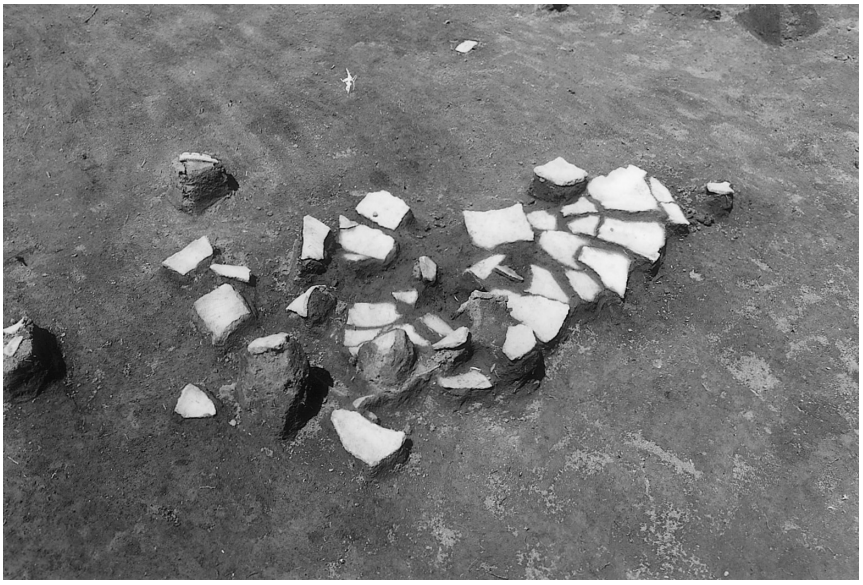
第 2 号住居跡
遺物出土状況



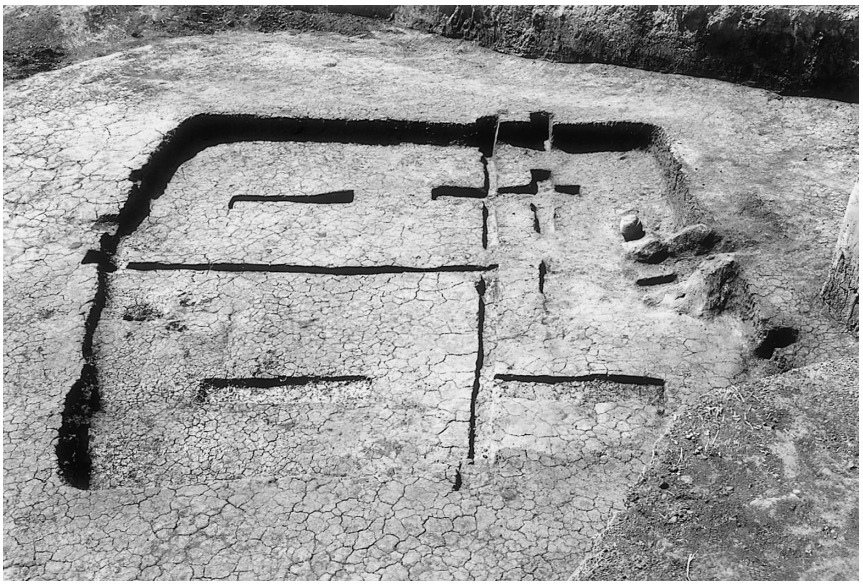
第 3 号住居跡
完　掘　状　況

第 5 号住居跡
完　掘　状　況

第 5 号住居跡
遺物出土状況



第 5 号住居跡
遺物出土状況



第 4 号住居跡
完掘状況

第 4 号住居跡
遺物出土状況

第 4 号住居跡
竈 完 堀 状 況

第 2 号火葬土坑
遺物(人骨・炭化物)
完 堀 状 況

第 2 号土坑墓
遺物(人骨・古銭)
完 掘 状 況

第 3 号 土 坑 墓
遺物(人骨)完掘状況

第 5 号 土 坑 墓
遺物(人骨)出土状況

第 1 号 溝 跡
完 堀 状 況

SK29-TP1

SK29-TP2

SK105-TP7

SK29-TP3

SK30-TP6

SK30-TP4

SK31-4

SK30-2

SK18-1

SK52-5

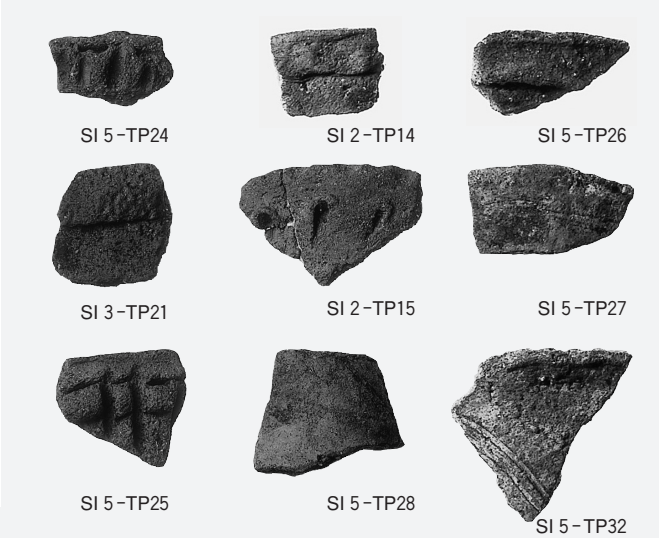
第18・29～31・52・105号土坑出土遺物

PL 8

SI 5-12

SI 5-17

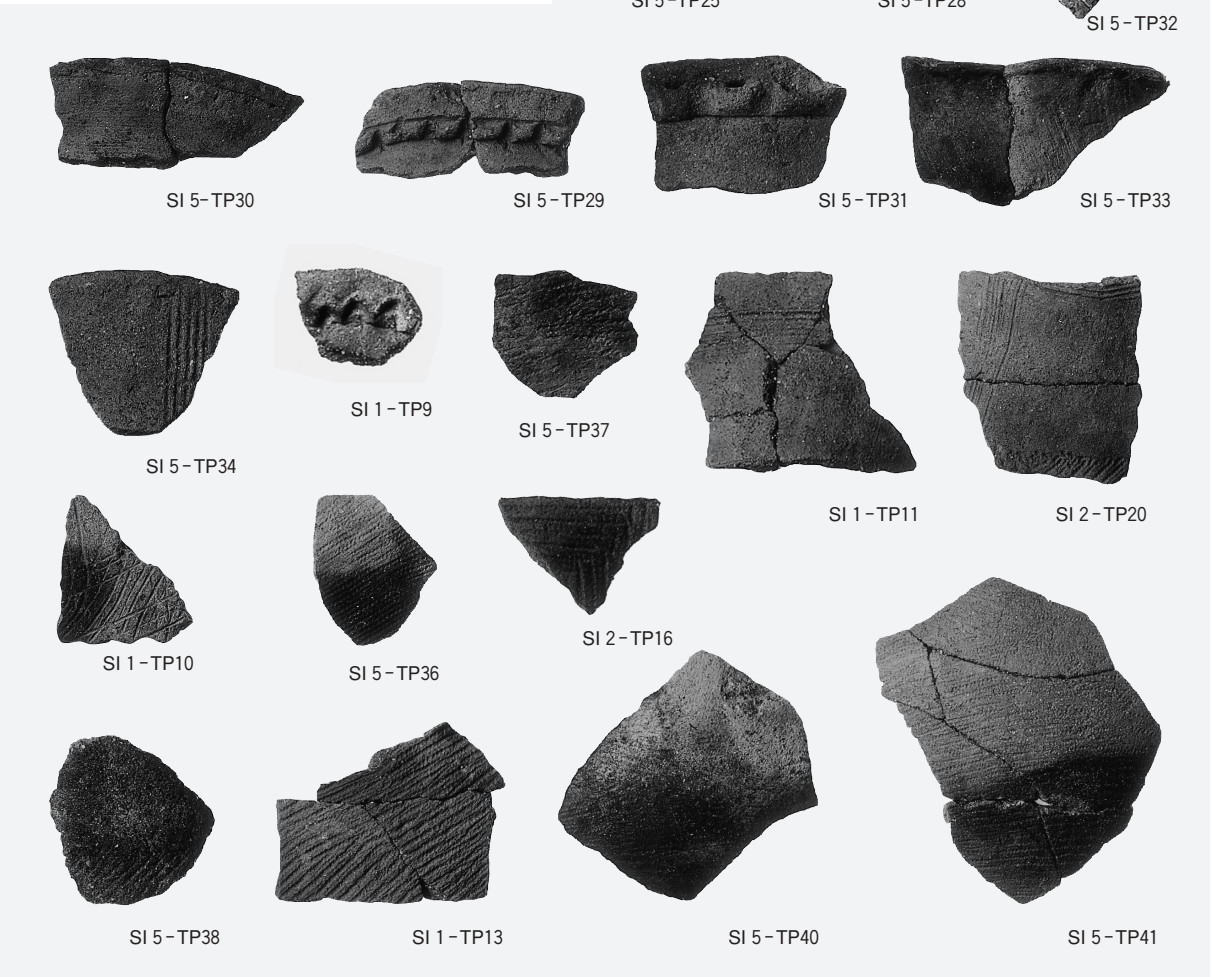
SI 5-DP1



SI 5-TP24 SI 2-TP14 SI 5-TP26

SI 3-TP21 SI 2-TP15 SI 5-TP27

SI 5-TP25 SI 5-TP28 SI 5-TP32



SI 5-TP30 SI 5-TP29 SI 5-TP31 SI 5-TP33

SI 5-TP34 SI 1-TP9 SI 5-TP37 SI 1-TP11 SI 2-TP20

SI 1-TP10 SI 5-TP36 SI 2-TP16

SI 5-TP38 SI 1-TP13 SI 5-TP40 SI 5-TP41

第１・２・３・５号住居跡出土遺物

SI 4-18

SI 4-19

SI 4-20

SI 4-21

SI 4-25

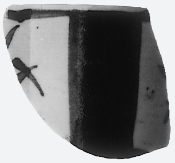
SI 4-26

SI 4-DP2

第2号土坑墓-M1

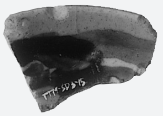
SD 1-27

SD 1-28

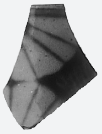


SD 1-29

SD 3-30



SD 3-31



SD 3-32

第 4 号住居跡，第 2 号土坑墓，第 1 ・ 3 号溝跡出土遺物

PL 10

遺構外出土遺物，ペグマタイト産石英片

茨城県教育財団文化財調査報告第263集

玉取向山遺跡

県立つくば養護学校（仮称）整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成18（2006）年３月20日　印刷
平成18（2006）年３月24日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
ＴＥＬ　029－225－6587

印刷　いばらき印刷株式会社
〒319－1112　茨城県那珂郡東海村村松字平原3115－3
ＴＥＬ　029－282－0370

『茨城県教育財団文化財調査報告263集』

付図　玉取向山遺跡遺構全体図